長崎県文化財調査報告書　第156集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ

2000

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第156集

県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ

・景華園遺跡（島原市）
・妙泉寺古墳群（芦辺町）

2000

長崎県教育委員会

発刊にあたって

長崎県は日本の西端に位置し，大陸からの文化をいちはやく受け入れた場所として多くの文化遺産に恵まれ，他にない特徴を備えた遺跡が数多く知られています。これらの文化遺産を守り，後世に伝えることは私達の責務であります。

長崎県では，平成９年度から県内の主要遺跡についてその内容を正しく理解し，その成果を広く教育現場や生涯学習に活用していただくことを目的に，ふるさと古代遺産保存継承事業の一環として県内主要遺跡内容確認調査を実施しているところです。

今回報告する妙泉寺古墳群・景華園遺跡は，古くから重要な遺跡として存在が知られ，その内容を確認することは長崎県の古代文化を解明する上でも重要な事と考えております。

今回の報告により，先の目的を達成するとともに，文化財の保護や愛護の精神がより一層広がることを願います。

平成12年３月31日

長崎県教育委員会教育長
木　村　道　夫

例　　言

1．本書は長崎県教育委員会が平成８年度から実施している県内主要遺跡内容確認調査の結果報告である。

2．本書には，平成10年度調査をおこなった景華園遺跡（島原市），妙泉寺古墳群（壱岐郡芦辺町）の結果報告を収録した。

3．本書では各遺跡について分担執筆をした。それぞれの遺跡については執筆者は，以下のとおりである。

景華園遺跡	福田一志・大浦雅宏
妙泉寺古墳群	副島和明・川口洋平・尾上博一

4．詳細は各項の例言を参照されたい。

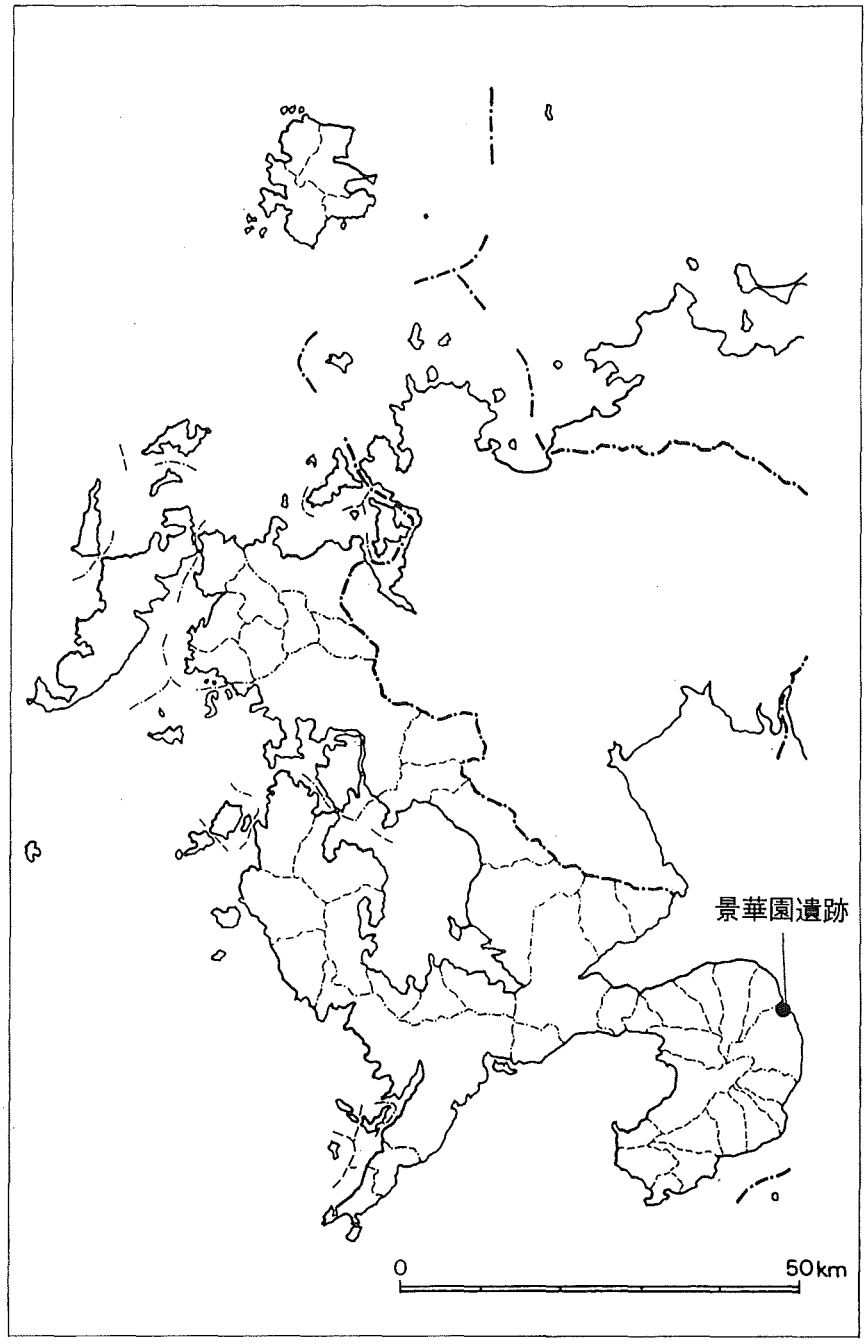
5．本書の総括編集は福田がおこなった。

総　目　次

第Ⅰ部　景華園遺跡 …… 1
島原市所在
第Ⅰ章. 地理的・歴史的環境 …… 4
第Ⅱ章. 調査の履歴と経緯 …… 8
第Ⅲ章. 出土遺物 …… 12
第Ⅳ章. ま と め …… 26

第Ⅱ部　妙泉寺古墳群 …… 27
壱岐郡芦辺町所在
第Ⅰ章. 遺跡の立地と環境 …… 30
第Ⅱ章. 調査の経緯 …… 32
第Ⅲ章. 調査内容 …… 33
第Ⅳ章. 総　　括 …… 46

第Ⅰ部　景華園遺跡



遺跡位置図

例　　言

1．本報告書は島原市中野町に所在する景華園遺跡の発掘調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，島原市教育委員会の協力を得て平成10年７月27日から９月４日にかけて実施した。

3．調査担当

長崎県教育庁文化課

文化財保護主事　福田　一志

同　　大浦　雅宏

同　　宇土　靖之（現有明町教育委員会主事補）

4．調査協力

島原市教育委員会

5．遺物の実測については，網谷泰代・川村由美子・森崎京子・黒川英子・近藤慶子・松尾美代子，トレースについては渡辺洋子・近藤千鶴の協力を得た。

6．本書における遺物・写真・図面については長崎県教育庁文化課立山分室で保管している。

7．本書は分担執筆し，各文末に記載した。弥生の土器については尾上博一（文化財調査員）の協力を得た。本書の編集は福田による。

本　文　目　次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 4

第１節　地理的環境 …… 4

第２節　歴史的環境 …… 6

第Ⅱ章　調査の履歴と経緯 …… 8

第１節　調査の履歴 …… 8

第２節　調　　査 …… 10

第Ⅲ章　出土遺物 …… 12

第１節　弥生土器 …… 12

第２節　その他の土器 …… 20

第３節　石　　器 …… 20

第４節　近世陶磁器

第Ⅳ章　ま と め …… 26

挿　図　目　次

第１図　島原半島周辺図 …… 5
第２図　景華園遺跡の位置 …… 5
第３図　周辺の遺跡出土の遺構・遺物 …… 6
第４図　景華園遺跡周辺の遺跡 …… 7
第５図　景華園遺跡出土の諸遺物 …… 8
第６図　平成３年調査出土の小児甕棺 …… 9
第７図　調査壙配置図 …… 10
第８図　大石実測図 …… 11
第９図　20トレンチ土層図 …… 12
第10図　土器 …… 13
第11図　土器 …… 15
第12図　土器 …… 17
第13図　土器 …… 18
第14図　土器 …… 19
第15図　その他の土器 …… 20
第16図　石器 …… 21
第17図　石器 …… 22
第18図　剥片石器 …… 23
第19図　石器 …… 23
第20図　近世陶磁 …… 24
第21図　近世陶磁 …… 24

表　目　次

第１表　景華園遺跡周辺の遺跡地名表 …… 7

図　版　目　次

図版１　遺跡中心部の現況 …… 51
図版２　遺物出土状況 …… 52
図版３　28トレンチの状況 …… 53
図版４　土器 …… 54
図版５　土器 …… 55
図版６　土器 …… 56
図版７　土器 …… 57
図版８　土器 …… 58
図版９　土器 …… 59

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境

長崎県の南東端に位置する島原半島は，北西部がわずか幅3.5kmの愛野地峡で肥前半島とつながり，北部から東部を有明海に，西部を橘湾に囲まれている胃袋状の半島である。半島の規模は東西約24km，南北約32km，面積は463km²で，気候は県南端に位置しているため山岳地域を除き比較的温暖である。山岳と海岸美で知られる景勝地で，中央部は雲仙岳を中心とした国立公園であり，海岸線一帯は島原半島県立自然公園となっている。地質・地形的には北部の雲仙火山地域と南部の南島原火山地域に大別できる。半島の4分の3を占める雲仙火山地域は，平成2（1990）年の普賢岳の噴火によりできた平成新山（1,489m）を主峰とする雲仙火山群の溶岩円頂丘が中央にあり，標高300～400mを扇頂部として北部・東部・南東部に火山性の扇状地が発達して裾野は有明海にのび，遠浅の砂質海岸となっている。南部の南島原火山地域は，第三紀層を安山岩や玄武岩を主体とする溶岩が覆う火山性台地で，起伏に富む地形をなしている。海岸線の総延長は130kmであるが，現在ではほとんどが護岸工事が施され，単調化し自然の姿は失われている。島原半島内の主要道路はほとんどがこの海岸線沿いを走っている。また，鉄道（島原鉄道）も同様にこの海岸線に沿って走っている。現行の行政区画では，雲仙岳を中心として放射状に島原市と南高来郡の1市16町に分かれている。

この半島の中核都市である島原市は島原半島の東部に位置し，観光と農業が主産業である。面積は58.96km²，人口は40,778人（1995.10.1現在）で島原半島の約4分の1を占めている。市中央に位置する眉山から東側に広がる緩やかなスロープ状の平坦地に市街地が広がり，目立った河川はないが地下水が豊富で市内いたるところで湧水を見ることができる。また島原城・武家屋敷等の名所とともに国指定の旧島原藩薬園跡，県指定のキリシタン墓碑「まだれいなの墓」，市指定の松平文庫など文化財も数多く存在する。

本遺跡は島原市の北部の有明海に面する丘陵先端部に位置し，海岸線からの距離は約150m，標高は10～15mを測る。遺跡の北側に金洗川，南側を中野川が流れており，遺跡の立地する丘陵は両河川に挟まれた火山性山麓地である。

（大浦）

（参考文献）

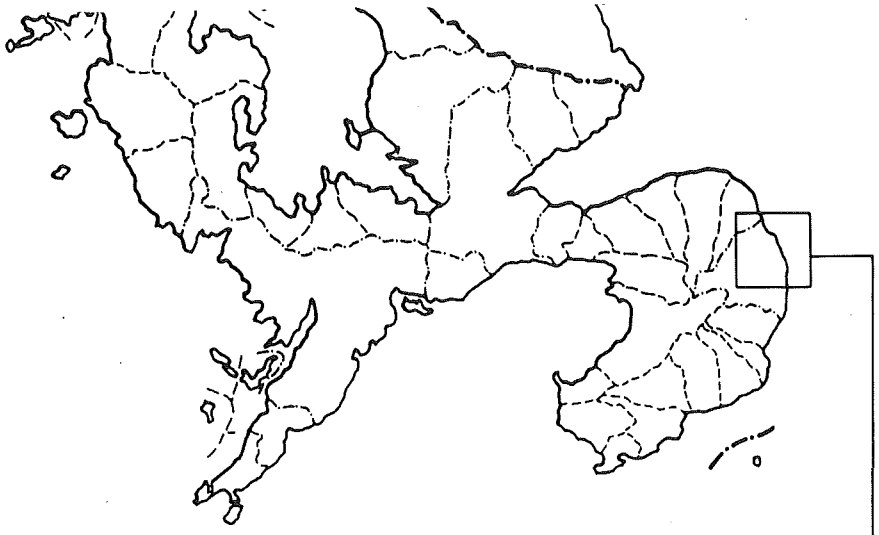
長崎県教育委員会　1997　『原始古代の長崎県』資料編Ⅱ

有家町郷土誌編纂委員会　1981　『有家町郷土誌』

有明町　1987　『有明町史』上巻

長崎新聞社　1984　『長崎県大百科事典』

長崎県　1998　『第45版　長崎県統計年鑑』



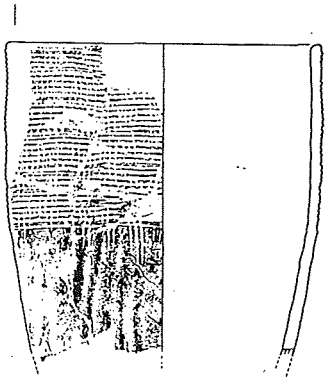
第１図　島原半島周辺図

第２図　景華園遺跡の位置　（５万分の１）

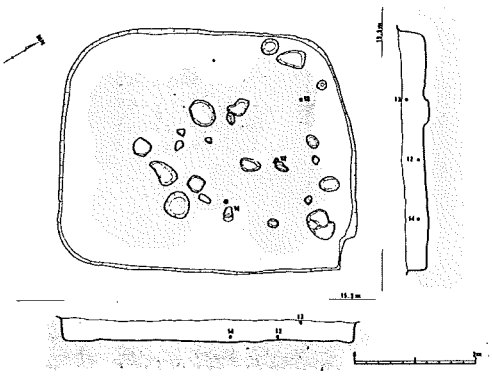
第２節　歴史的環境

景華園遺跡周辺は雲仙山系や阿蘇の火山灰の堆積により，低丘陵が発達している地域である。雲仙山系を源とする諸河川は，この丘陵を刻み多くの独立した小丘陵を形成し有明海へと連なる。丘陵はヤツデ状を呈し島原半島全体に広がりを見せるが，この独立丘陵が古代から生活の場に供されており丘陵の環境がいかに重要であったかが知られる。特に景華園遺跡周辺の遺跡密度は高く，島原地区でも一番の遺跡密集地帯である。第４図は景華園遺跡周辺の遺跡分布を示したものである（遺跡分布図は景華園遺跡を中心とする扇状地の中間部から末端部分を選定したものである）表１からも理解できるように，この地域では旧石器時代の遺跡は，一野遺跡でナイフ形石器が表採されている程度でほとんど確認されていない。縄文時代の遺跡は22箇所，弥生時代の遺跡19箇所，古墳時代15箇所（重複するものも数に入れた）となっている。それぞれの時代における分布は，弥生・古墳時代が標高の低い部分に占拠し，縄文時代の遺跡はやや標高の高い部分に位置する傾向にあると言えるが，縄文時代の中でも前期・中期・後期は海岸部に集中し，縄文時代の晩期がやや高いところに占居する傾向にあるといえよう。縄文時代の早期の遺跡は一野遺跡（９）が代表的で，円筒形の厚手の土器の一野式土器が出土し，長貫遺跡（40）では押型文土器が出土している。前期・中期では三会下町遺跡（22）で轟式・曽畑式，並木式土器が，後期としては，同じく三会下町遺跡で北久根山式土器・鐘崎式土器，小原下遺跡（１）で三万田式土器が，稗田原遺跡（28）で坂の下式土器が数点出土している。この他の縄文時代の遺跡のほとんどは晩期の遺跡で占められ，ここには示されていないが，礫石原遺跡など著名な遺跡がある。弥生時代の遺跡としては，景華園遺跡の他に後期初頭の住居址が数棟発見された一野遺跡が著名である。一野遺跡はこのほか石棺も多数発見されており，景華園遺跡の北側丘陵上にあることから景華園遺跡との一連の遺跡として捉えるべきであろう。古墳時代としては高塚墳が６遺跡確認されている。遺跡としては松尾遺跡（７）が調査されており，８世紀代を中心とする須恵器・土師器が多量に出土している。この中でも特筆される遺物として「直」の文字が刻まれた土師器坏がある。このことは古代の豪族がこの地に存在した可能性を示唆するものであり，原始～古代にかけてこの地がいかに重要な地域であったかを示すものと思われる。

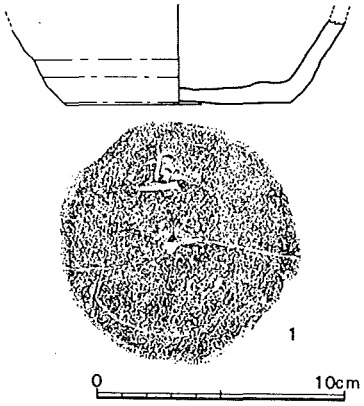
（　）内の数字は遺跡地名表と附合する。　　（福田）



一野式土器

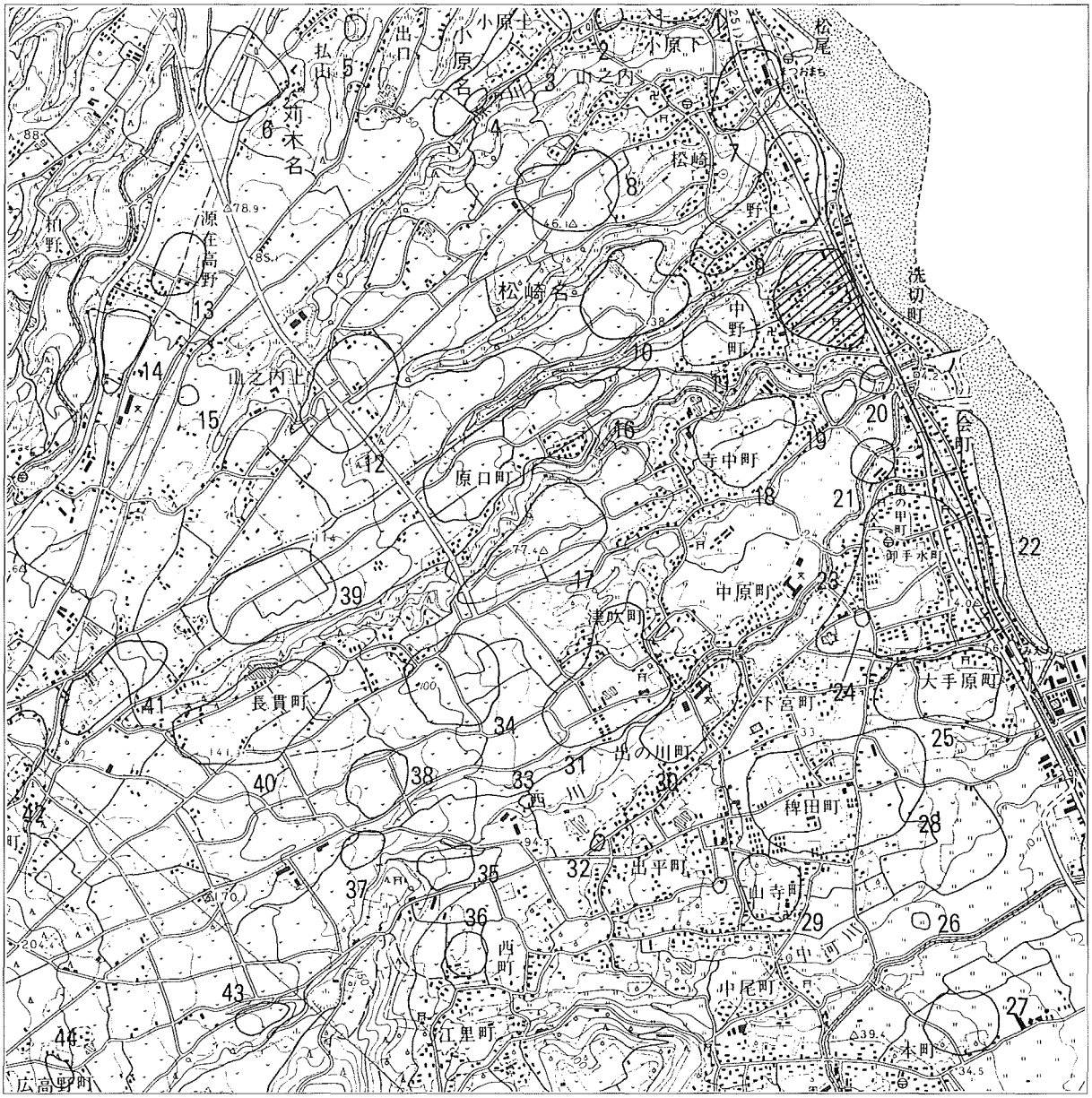


一野遺跡出土弥生住居



松尾遺跡出土文字入須恵器坏

第３図　周辺の遺跡・出土の遺構・遺物



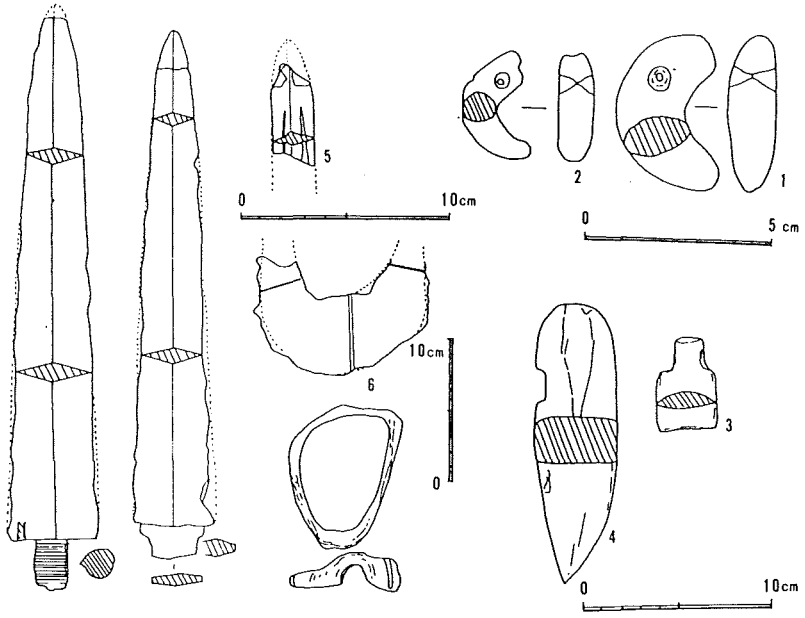
第4図　景華園遺跡周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	小原下遺跡	縄	12	灰ノ久保遺跡	縄	23	畑中遺跡	弥・中	34	長貫B遺跡	縄・弥
2	小原下B地点	〃	13	下源在高野遺跡	〃	24	大塚古墳	古	35	大塚下遺跡	中
3	小原上遺跡	〃	14	上源在高野遺跡	〃	25	下宮遺跡	縄弥近	36	坪浦遺跡	縄
4	国土神社裏遺跡	古	15	山ノ内上古墳	古	26	長塚古墳	古	37	大塚後遺跡	〃
5	拂山横穴古墳	〃	16	原口B遺跡	弥・古	27	道田遺跡	弥	38	南楠沢遺跡	弥
6	上松高野遺跡	弥	17	寺中A遺跡	弥	28	稗田原遺跡	縄弥古	39	原口A遺跡	縄・弥
7	松尾遺跡	古・奈	18	寺中B遺跡	弥・古	29	山崎遺跡	弥・古	40	長貫A遺跡	先・縄
8	山ノ内遺跡	〃	19	寺中城跡	中	30	三会中学校遺	縄	41	下油堀遺跡	縄・弥
9	一野遺跡	縄弥古	20	中野川遺跡	弥	31	津吹遺跡	縄・弥	42	上油堀遺跡	縄
10	上一野遺跡	縄	21	西川遺跡	〃	32	鬼の塚古墳	古	43	尻無遺跡	〃
11	上中野遺跡	弥・古	22	三会下町海中遺跡	縄・弥	33	人塚古墳	〃	44	大タブ沢遺跡	縄・中

第Ⅱ章　調査の履歴と経緯

第１節　調査の履歴

景華園遺跡については古田正隆が著した「三会景華園遺跡」のなかで詳しく紹介がなされている（古田1963）。ここでは古田の著書をもとに景華園遺跡の発見の契機からこれまでの調査について紹介していく。景華園の名称は江戸時代，当時の島原藩主がこの地に別邸を構え，その別邸の名称として付けられたものである。この別邸構築の際に銅剣２本が発見されたことが『深溝世紀』中に次のように記されている。「庭中に四，五個の大石があって皆平たい，最も大きなものは正方形で盤のようであり，上に数十人が，座ることが出来る。昔このあたりに長者がいて，黄金を石の上にほしていたので曝金石と名付けられた。藩公が景華園を開く時，この石を移したところ，その下から銅剣二本が出て来た」。これが景華園遺跡についての最初の記録である。この記録では，大石が四，五個あったと記載され，現在当地に残る１個の大石の他，幾つかが存在したことがわかる。大石については旅館の庭石や記念碑として転用されたり，島原城内に展示されたりして散在しているようである。その後記録は途絶えるが，大正から昭和２年の頃に中細形銅矛が２本発見され，昭和初期の採土の際にも多くの甕棺が出土したらしいが，その都度一括して埋められたとされる。昭和２年には，台地の中央部から甕棺が発見され，立会調査がおこなわれ，その時の状況として「甕を横にして側面より口に石蓋をし，その南側と底部の東側に板状の割石を立てて，コの字様に甕の護石を置き，更にその上に被せるように平らな大石を上に置いた組織のもの」が検出され，内部からは布片と玉類が出土したとされる（島田1931）。昭和32年に島原を襲った大水害は，災害復旧用採土採取地として景華園遺跡が存在する台地の削平を余儀なくした。この削平によって台地のほとんどが削られ，古田は「全国的にみても顕名な，民族の文化遺産である弥生遺跡が遂日その姿を消していった」と記している。昭和33年には島原市教育委員会が主体となり調査をするが，地層の攪乱がはげしく途中で中止されている。ただ，このときの調査により鉄製鏃先が出土している。同じく昭和33年に削平された台地の断面に甕棺３基が発見され，２本の銅剣と管玉数十個が出土している。この他この時期に相前後して勾玉・扁平石斧・貝釧・細形銅剣が採集され細形銅剣につ



第５図　景華園遺跡出土の諸遺物

いてはその特徴により「鉄剣型銅剣」として報告されている（小田1960）。採土工事の他，景華園遺跡東側には国道が敷設されることになり，この工事の際にも径１ｍ，厚さ30㎝程の板状石の下より須玖式の甕棺と人骨が出土したことが知られるが，工事の際に処理されたといわれている。古田は昭和32年の災害復旧から国道施設工事で出土した甕棺の総数は50基を下らぬものと推定しており，景華園遺跡がいかに大規模な弥生遺跡であったかを力説している。これら一連の発見は景華園遺跡の規模や遺物の内容，特に青銅器の発見は島原半島において現在に至ってもこの１例しか出土例がないことや，大石の存在から巨大な支石墓の存在など多くの問題を提起した。ただし，ほとんどのものが本格的な調査で得られた資料ではないため，多くの問題をはらんで現在に至っている。特に古田は景華園遺跡に残る大石について触れ，巨石文化の存在を指摘している。ただし，過去の記録を読んでみても径１ｍ，厚さ30㎝の石が甕棺の上にあったとする国道工事の記録にやや大きい石が記録されるくらいで，景華園遺跡に現在も残る大石（約３ｍ×４ｍ）が甕棺の上にあったとする記録は皆無である。現実的にはこの大石が弥生時代のものと指摘できる材料はないといっても過言ではなかろう。さてこの昭和30年代の遺物・遺構の発見以後調査らしい調査はおこなわれていないのが現状である。景華園の中心部が先の災害復旧に伴う台地削平により消滅したとする見解が一般的であったこともその一因であったと思われる。その後の調査については，平成３年に病院建設に伴い島原市教育委員会により試掘調査を実施していることが挙げられる。試掘の結果ほとんどの試掘壙で攪乱の状態であったが，一基の小児甕棺が確認されている（第６図）。報告者によれば耕作土下20㎝から検出され，主軸はほぼ南北を向き，頭位方向は南。上甕，下甕とも耕作のため上半分が削平されているとしている。このことからも景華園遺跡の広がりは広大なものと考えられ，景華園遺跡の北側台地に位置する一野遺跡でも弥生後期初頭の住居址や石棺などが発見されており，これも景華園遺跡の一部として捉える必要がある。この地一帯が大規模な弥生時代の一大遺跡であったことを再認識する必要があろう。

（福田）

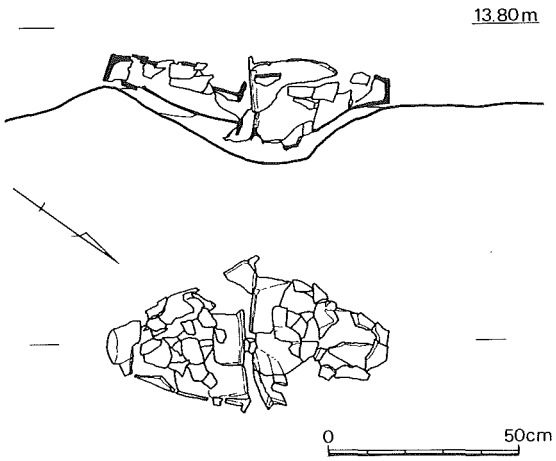
参考文献

小田富士雄 1960「島原半島景華園の遺物」
『考古学雑誌』四五－三

古田正隆 1963『三会中野景華園遺跡』
島原市教育委員会

古田正隆 1964『一野遺跡』
長崎県南高木郡有明町教育委員会

高野晋司・浦田和彦 1992『一野遺跡』
長崎県有明町教育委員会

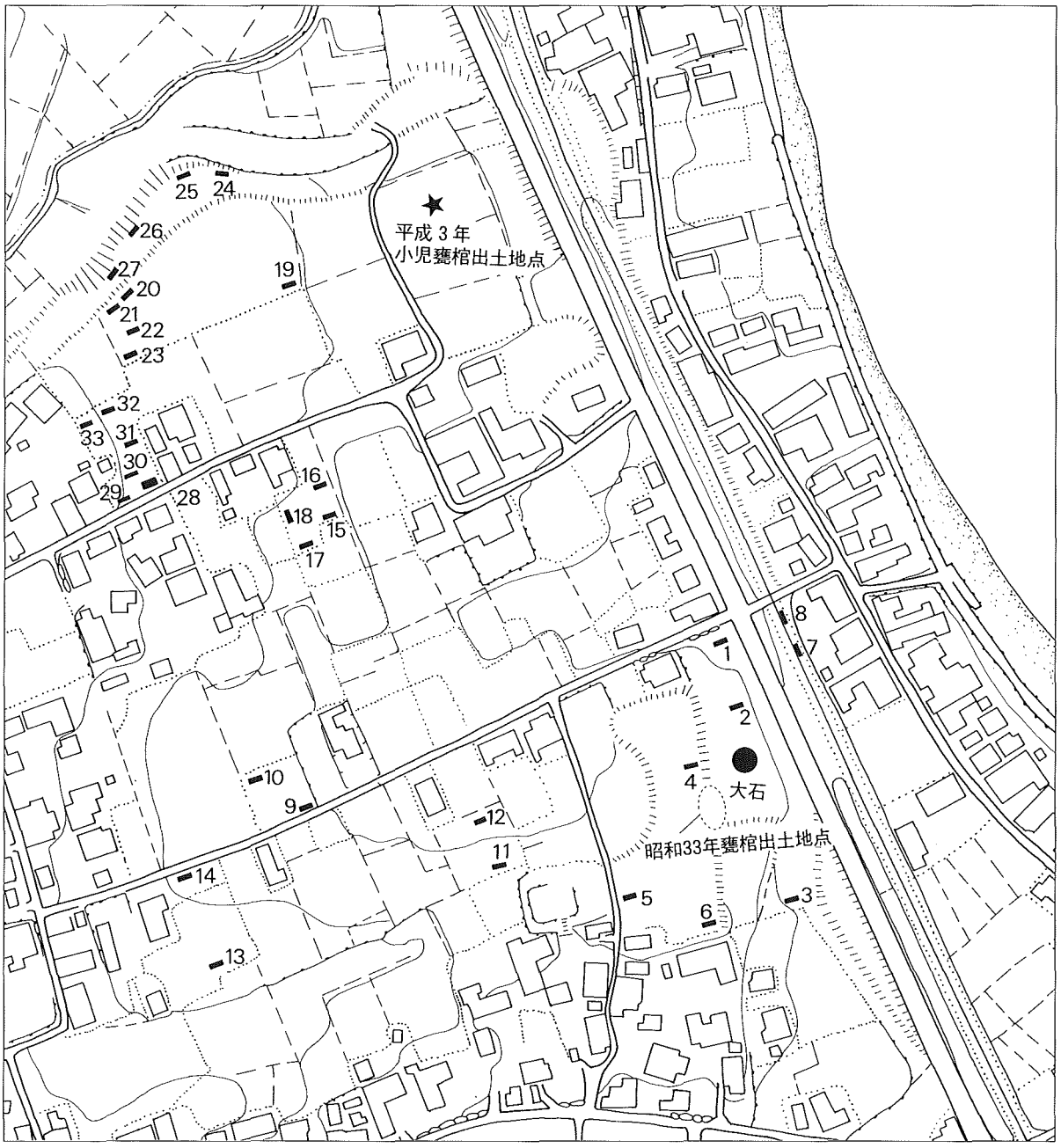


第６回　平成３年調査出土の小児甕棺

第2節　調査

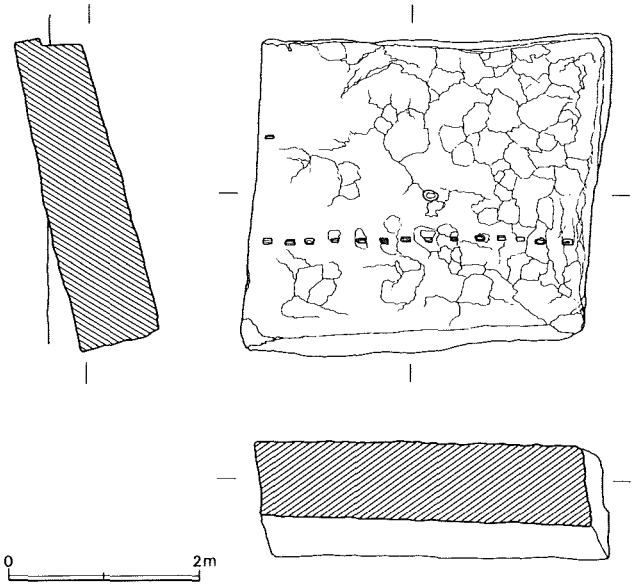
調査は1×5mのトレンチを主体に33ヶ所設定した。設定にあたっては，地主の承諾が得られない場所もあり，十分な配置が出来ない部分もあった。設定は，現状確認のため昭和32年に削平されたとされる景華園遺跡の中心部とその西側，及び緩い谷を挟んだ北側の丘陵を中心に調査をおこなった。

標石墓とされる大石は，その状況から旧状を止めていないと判断されたが，念のため十字のトレンチを設定し大石の実測もおこなった（第8図）。トレンチ設定の結果，表土下20～30cmで阿蘇の白色粘土層が確認され，遺構等の検出もなかった。西側にそびえる崖面上が旧来，大石があった場所と判断でき，昭和32年の削平工事によって現在の地に移動したものと考えられる。大石は南北に約3m，東西に約 3.6m，厚さ約80cmを測るほぼ正方形を呈する。表面，側面ともコツコツと叩いて整形した

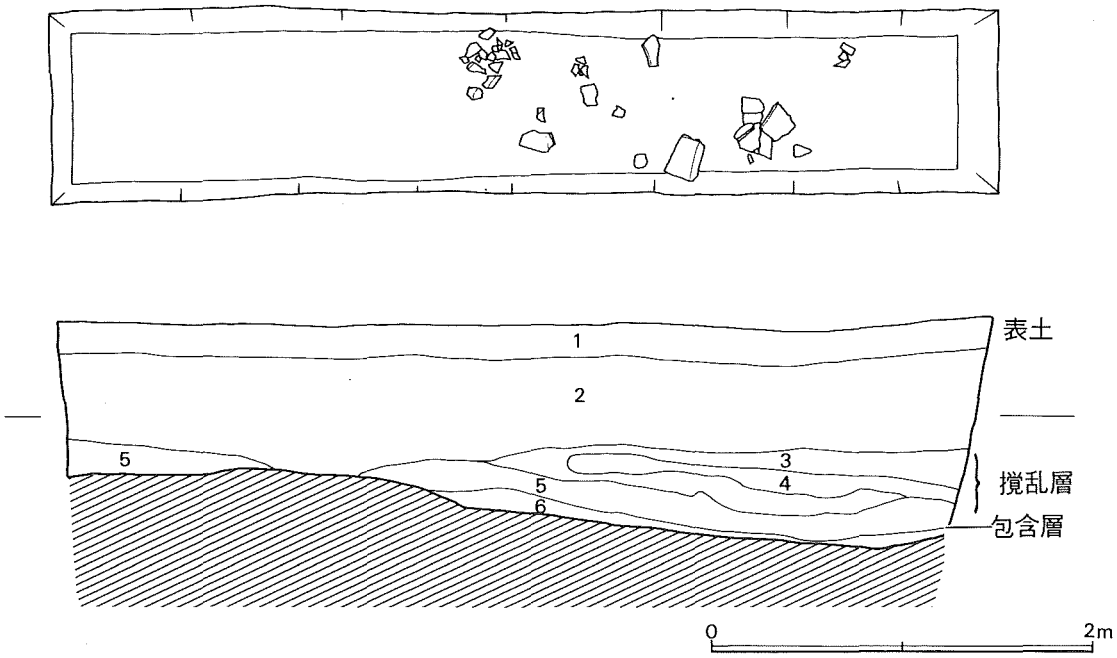


第7図　調査壙配置図

ものと思われ，表面に薄く剥がした無数の痕跡が残る。側面に楔の痕跡は見られなかったが，整形によって消滅したものであろう。また，表面の楔痕は後世において大石を分割しようとした際のものと思われ，１列目はほぼ10cm間隔で14個，２列目にも１個の楔痕が確認したが結局分割を放棄している。この地区にはこの他３ヶ所にトレンチ（番号１～３）を設定したが，昭和32年の削平がこの台地の東半分を完全に削平した状況が確認された。ただし，表土に弥生土器の破片が混入しており，以前はかなりの遺物が存在した可能性を示唆する内容であった。また，高台にも３ヶ所トレンチを設定したが，表土下はすぐに明黄褐色（百花台８層相当）の土が表れ，遺構等は確認できなかった。地主の聞き取りでは，この部分も全体的に赤土の採土がおこなわれており，土の入れ替えをおこなったものらしい。このような状況は９～14トレンチにおいても同様であった。変わって緩い谷部を挟んだ北側台地に15～33のトレンチを設定した。15～18トレンチでは遺構の確認はできなかった。19トレンチは途中まで調査をおこなったが，作付けとの関係で中途で調査を終了した。20～23トレンチでは明黄褐色土の上に僅かではあったが包含層が確認され，弥生土器の他晩期の土器が少量出土した。28～33トレンチでは近世の攪乱がはげしく，近世の廃棄土壙などが確認され，28トレンチでは近世陶磁器とともに弥生土器が大量に廃棄された状況を検出した。今回の調査で出土した弥生土器のほとんどがこの近世廃棄土壙からの出土で，この周辺にかなりの包含層があった事が推定できる内容であった。今回の調査から，景華園遺跡のほとんどが建築用の採土によって破壊されていることが確認された。ただし，19～23トレンチ周辺は包含層が残っている可能性大で，今後この地区を中心に保存をはかっていかなければならないであろう。



第８図　大石実測図（１／80）



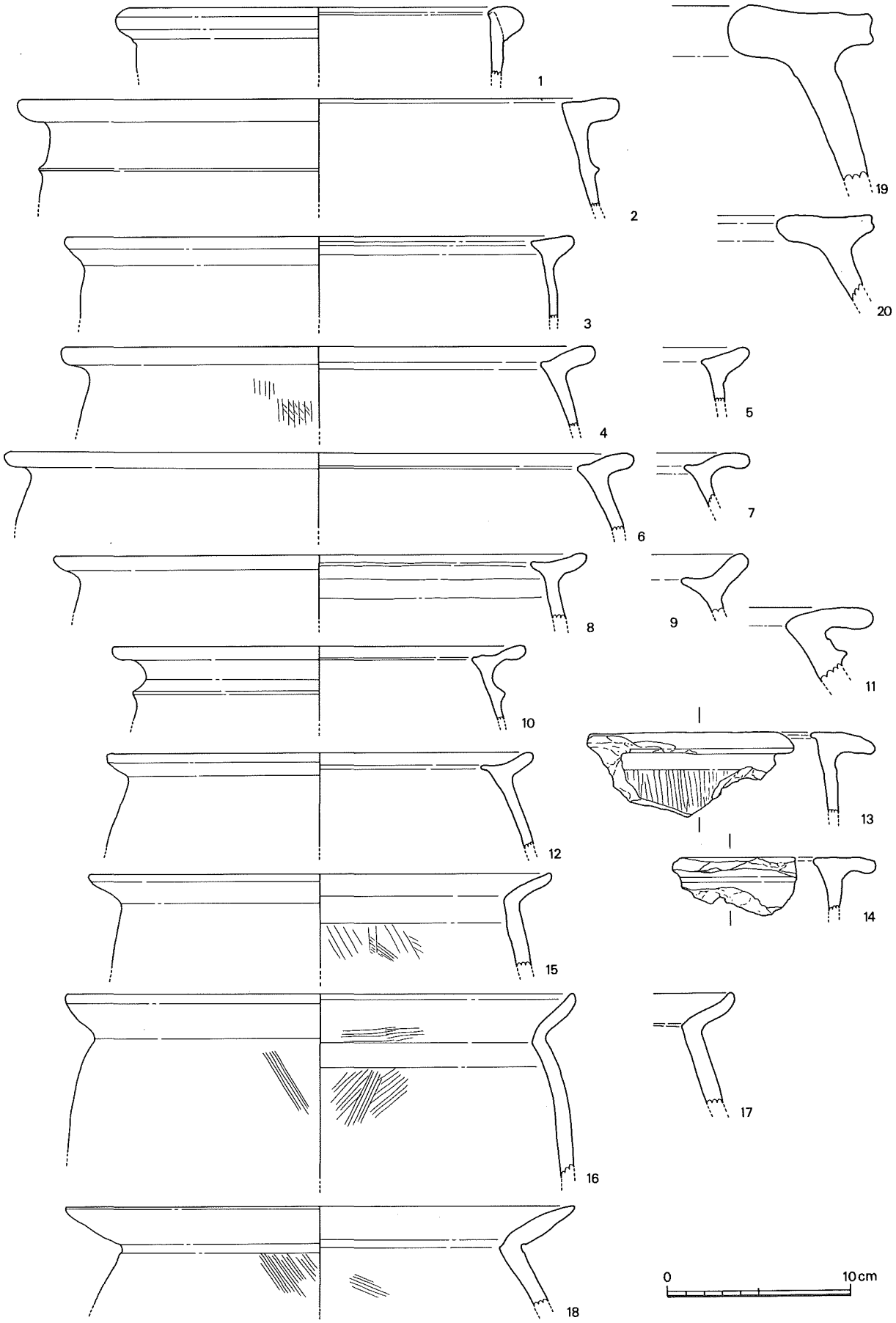
第９図　20トレンチ土層図

第Ⅲ章　出土遺物

第１節　弥生土器（第10～14図）

１は甕の口縁部である。口縁部に断面円形の粘土紐を貼りつけ横位のナデ調整を施す。仕上げは粗い。胎土は石英，金雲母，長石をふくんで粗い。内器面にユビオサエのあとが残る。擬無文土器か。にぶい橙色。

２は断面逆Ｌ字形の甕口縁部で，口縁下に断面三角形の突帯を巡らせる。口縁上面は，ごくわずかなくぼみが認められるものの，ほぼ平坦と言ってよい。金雲母を胎土にふくみ，明褐色に近い橙色。３は断面三角形の甕口縁部で，内器面に若干の張り出しがあり，ユビオサエのあとが残る。浅黄橙色で，胎土に黒雲母をごくわずかにふくむ。４は断面逆Ｌ字形の甕口縁部で，内傾し，口縁上面にわずかにくぼみがみられる。口唇部断面はＵ字形である。外器面にハケメ調整を施す。金雲母を胎土にふくみ，褐色に近いにぶい橙色。５は外への張り出しの強い断面三角形の甕口縁部である。内傾し，口縁上面がわずかにくぼむ。胎土に石英，黒雲母，金雲母をふくみ，灰白色を呈する。６は内に低く傾斜する断面逆Ｌ字形の甕口縁部である。口唇部が断面Ｕ字形で，下に若干垂れた印象があり，内側への張り出しがやや強い。石英と，わずかに金雲母を胎土にふくみ，にぶい黄橙色。７は甕口縁部で，６からさらに口唇部が垂れる度合いが強くなり，口縁厚もより薄くなる。口唇部の断面は丸い。内側への張り出しが薄く，強くなる。胎土に石英，金雲母をふくみ，橙色。８は，口縁上面がくぼむ甕口縁部である。内側への張り出しが強く，口唇部が持ち上がり，断面はＴ字形に近い。胎土はこまかく，淡黄色。９は甕口縁部で８よりさらに内側への張り出しが強調される。口唇部が立ち上がり，断面は丸い。口縁部断面はＴ字形に近い。胎土に黒雲母，石英をふくみ，淡黄色。10は断面逆Ｌ字形の甕口



第10図　土　器

縁部で，上面がくぼみ，口縁下に少し離れて断面三角形の突帯が巡る。口唇部は断面が丸い。胎土に黒雲母，細粒砂をふくみ，にぶい浅黄色。

11は屈曲のつよい逆Ｌ字形の甕口縁部である。口縁下に断面三角形の貼りつけ突帯を巡らす。中期後葉。胎土に金雲母，石英その他の細粒砂をふくむ。

12は断面逆Ｌ字形の甕口縁部である。上面がくぼみ，内側に長めの張り出しがある。胎土に石英，金雲母をふくみ，にぶい黄橙色。縦位のハケメ調整を施す。２～10，12は中期中葉から後葉の時期に比定される。13は口縁が断面逆Ｌ字形で，外方がたれ下がりぎみの甕口縁部である。内側にわずかな張り出しをもつ。胎土に石英，黒雲母をふくみ，赤褐色に近い橙色である。胴部に縦位のハケメを施す。中期後葉。14は逆Ｌ字形の断面をもつ甕口縁部である。内器面がやや張り出す。口唇部外方がややたれ下がる。胎土に細かな雲母をふくみ，橙色。

15・16・17は断面がくの字形で口唇部が跳ね上がる甕口縁部である。色調が白みがかり胎土が土師質である。時期は後期か。15は口唇部が上方にわずかに跳ね上がる。胎土に黒雲母，石英その他の細粒砂をふくみ，淡黄色。内器面に幅広のハケメを残す。16は15・17より口縁の屈曲が弱く，より立ち上がった感じになる。胎土に若干の黒雲母，細粒砂をふくみ，にぶい黄橙色。外器面は縦位のハケメを横位のナデで消している。内器面には斜位のハケメを施す。内器面のハケメは口縁部の屈曲部にも残る。17はよりつよく口唇部が跳ね上がる。胎土に金雲母，黒雲母をわずかにふくみ，細粒砂が混じる。白っぽい淡黄色。横位のナデを施す。

18は土師質の土器で，布留式の影響がみられる。

19は成人用甕棺の口縁部。胎土に金雲母，石英その他の細粒砂をふくむ。断面がＴ字形を呈する。外に低く傾斜する。橋口編年におけるＫⅡｃ期に相当するとおもわれる。20も断面がＴ字形の甕棺口縁部である。胎土に金雲母，石英をふくむ。おなじくＫⅡｃ期に相当しよう。

21～23は断面がくの字形の後期の甕口縁部である。いずれも胎土に金雲母，石英をふくむ。

24は口縁下に三角形の突帯を持つ壷である。胎土に雲母，石英をふくむ。

25～29口縁部断面が鋤先形の壷である。それぞれ胎土に金雲母，石英その他の細粒砂をふくむ。30は口縁が直立する壷である。頸部と胴部の境が明瞭。胎土に金雲母，石英，長石をふくむ。

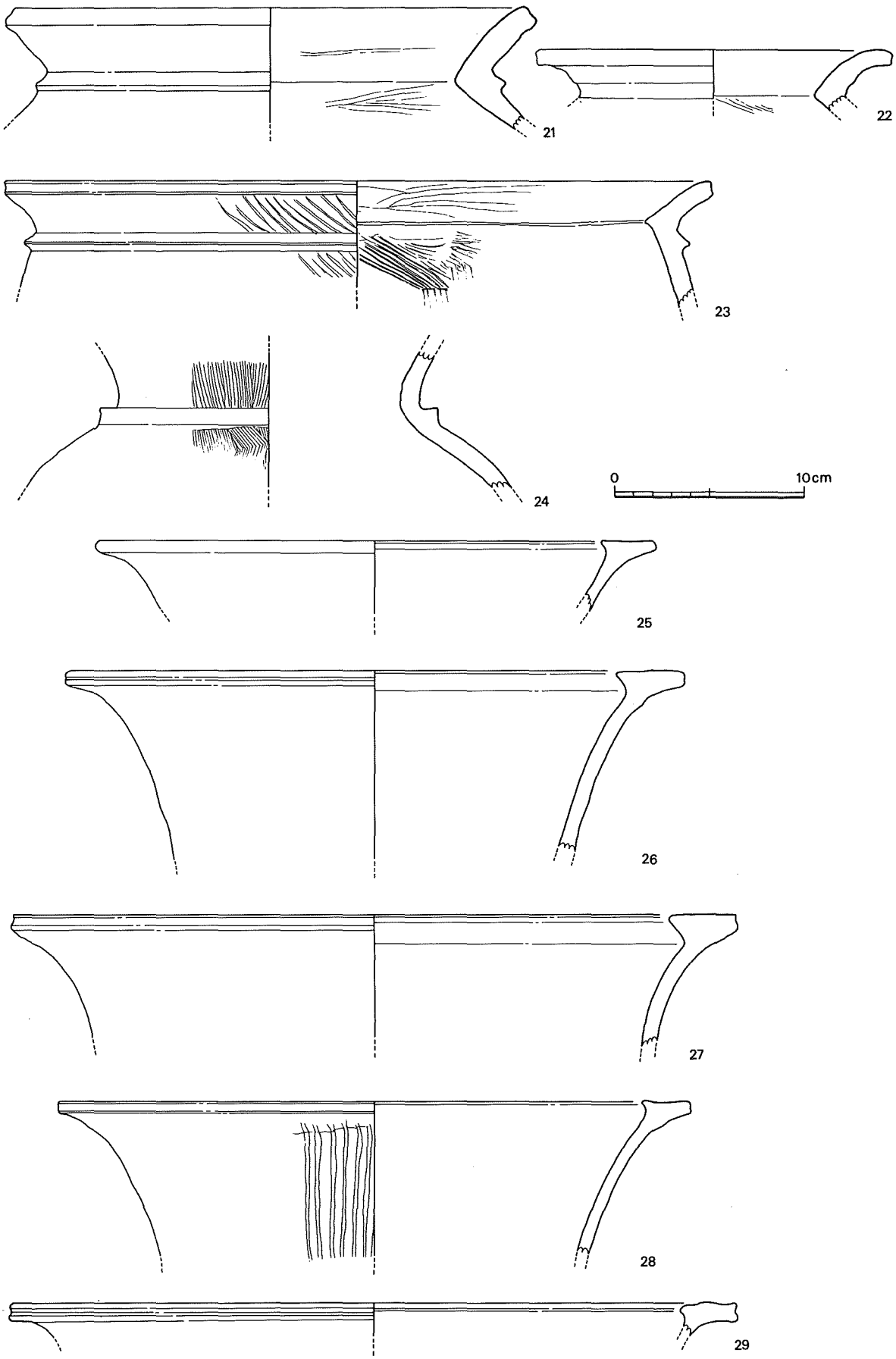
31・32は須玖式の甕。いずれも胎土に金雲母，黒雲母，石英，長石をふくむ。ともに縦位のハケメを施し，胴部に曲線的な沈線を１条巡らす。

33，36は弥生後期の大型壺の系統を引くが，器形的には古墳初頭の複合口縁壺か。胎土に雲母，細粒砂をふくむが，36がより粗い。

34～35，37～38は壷の底部。35は丸底で，37は成人用甕棺の底部であろう。39～45は甕の底部。39は中期前葉，40～42は中期中葉，43～45は中期後葉に比定されよう。

46は鋤先状口縁の高杯。50は高杯。47は広口壷の口縁部。胎土に雲母，石英をふくむ。48は頸部と胴部の境目に刻目のある突帯をもつ壷の口縁部。49は丹塗りの袋状口縁壷の頸部である。

51～52はすかしをもつ器台の脚部。53はミニチュア壷。54～58は高杯の脚部。



第11図　土　器

55・56・58は丹塗り。56は暗文を施す。

59～69は甕棺の胴部。突帯が1条～3条のものがある。

59は2条の断面三角形突帯をもつ。胴部に斜位のハケメ調整を施す。内器面には幅の広いハケメ調整を施し，部分的に細かいハケメを上から重ねている。突帯裏は横位のナデによりハケメは消されている。胎土に雲母，石英を若干ふくむ。60は太く高い刻目のある断面三角形の張り付け突帯を巡らす。胎土に雲母，石英等の細粒砂をふくむ。

61は低い，みかけ2条に近い貼りつけ突帯をもつ。胴部外器面に斜位のハケメを施す。内器面はナデ。胎土に黒雲母，石英をふくむ。62は断面三角形の貼りつけ突帯を2条巡らす。胎土に金雲母，石英をふくみ，焼成はは良好でかたくしまっている。赤褐色に近い橙色。横位のナデを施す。

63は断面三角形の突帯を3条もつ。外器面に縦位のハケメを，内器面に斜位のハケメを施す。胎土に金雲母，長石，石英をふくむ。焼成は普通。黄橙色。64は刻目があり，裾が広く低い突帯を1条もつ。外器面は斜位のハケメをナデ消し，内器面には不整方向のハケメを施す。焼成は良好で，胎土にごく微量の金雲母と長石をふくむ。

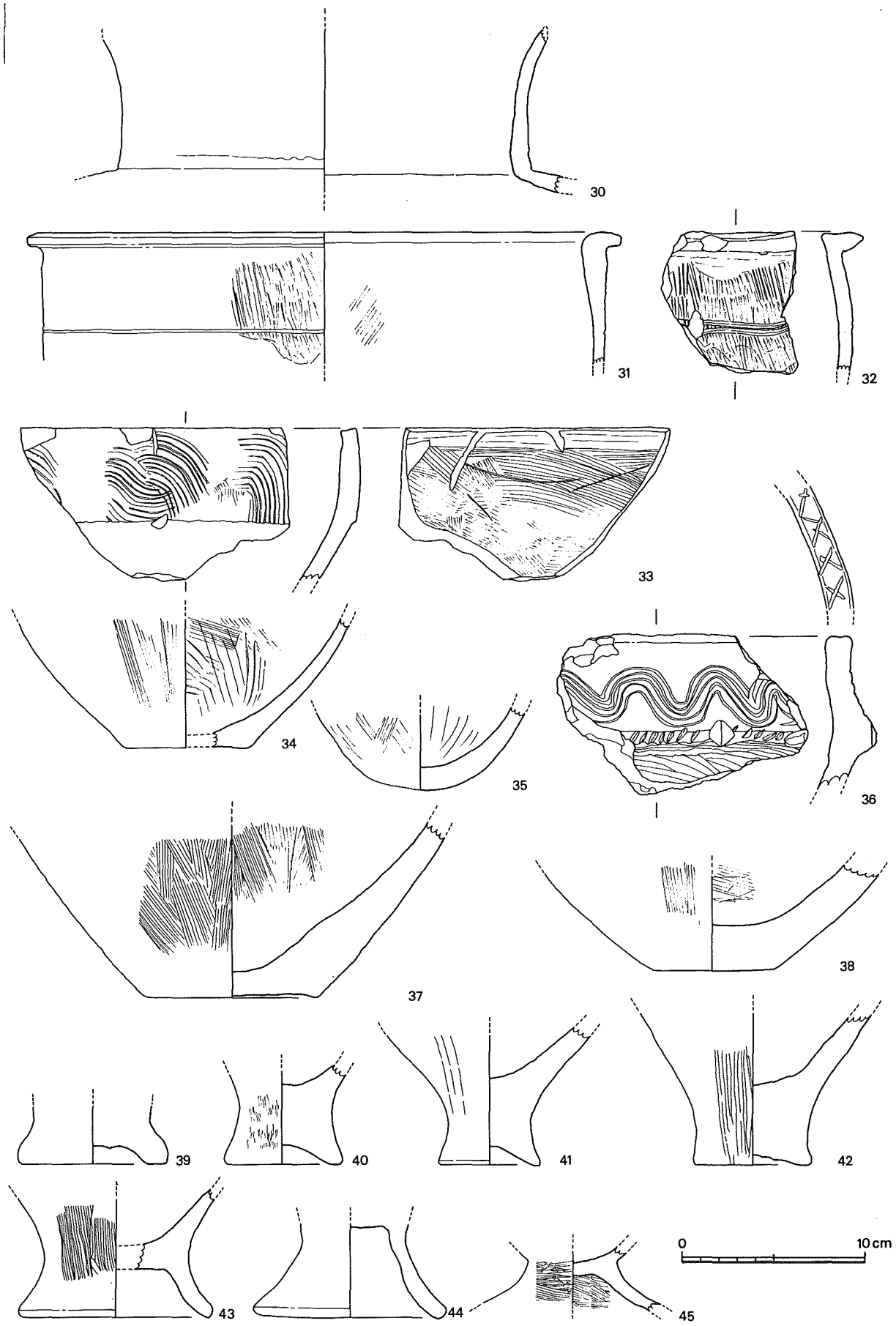
65上面がくぼむ，コの字形突帯を1条もつ。突帯には斜方向に刻目がある。外器面は縦位のハケメを横位のナデで消し，内器面は斜位のハケメをなで消している。焼成は良好で黒・金雲母をふくむ。66は，刻目のあるコの字形突帯を2条巡らす。胴部に斜位のハケメを施し，なで消さない。内器面にも斜位のハケメを施し，ともに丁寧な調整である。胎土に金雲母，石英，長石をふくむ。にぶい黄褐色。67は刻目をもち，太く大きなコの字形突帯を2条，ごく浅い刻目のある三角形突帯を1条もつ。突帯はいずれもあまり精緻ではなく，ゆがみがみられる。遺存状態が悪いが，斜位のハケメを施すようである。胎土に石英，長石をふくみ，粗い。在地産か。68は，間隔に広い刻目のある断面三角形の突帯を2条巡らす。刻目は明瞭で，上位の突帯に施されたものがやや小さい。調整には外器面に幅広の縦位のハケメを施す。ハケメは突帯部分にもおよび，突帯頂部付近のみ，なで消している。内器面は不整方向に幅広のハケメを施す。胎土に長石とわずかに金雲母をふくむ。69は，コの字形を意識したものであろうが，山形の刻目をもつ突帯を2条巡らす。刻目も粗く，突帯付近に施した横位のナデ調整も強いため，精緻な感は薄い。外器面には縦位の細かいハケメを施す。内器面は幅広で不整方向のハケメを施す。一部上から横位のナデが施される。胎土に金雲母，石英をふくむ。

図示しなかったものも含めて，甕の口縁部や底部などからは中九州的な様相が伺える。対して丹塗の祭祀用土器や成人用の大型甕棺には北部九州的な色彩が濃い。甕棺は中期後半を中心に，後期前葉のものもふくむようである。

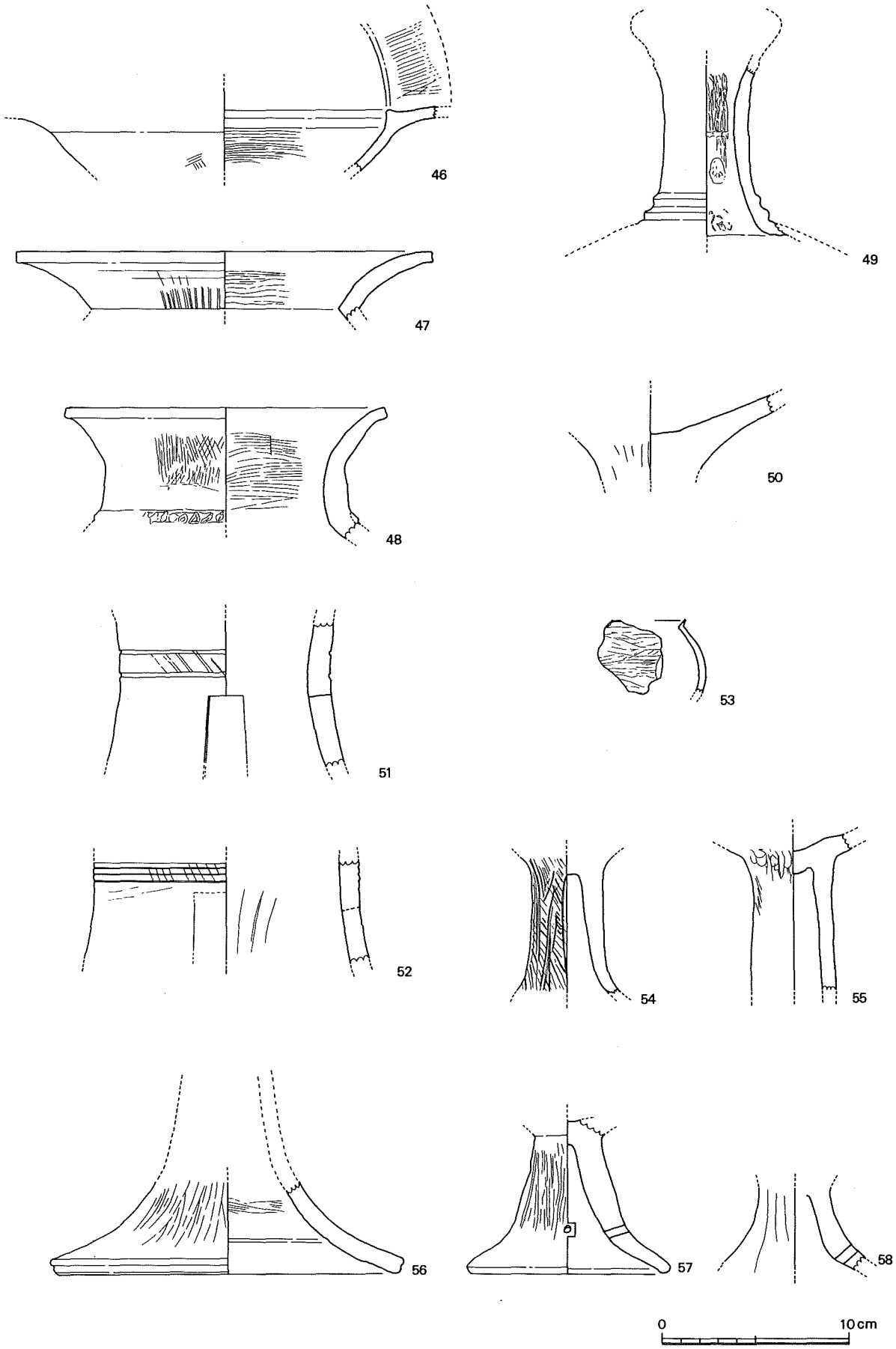
（尾上）

参考文献

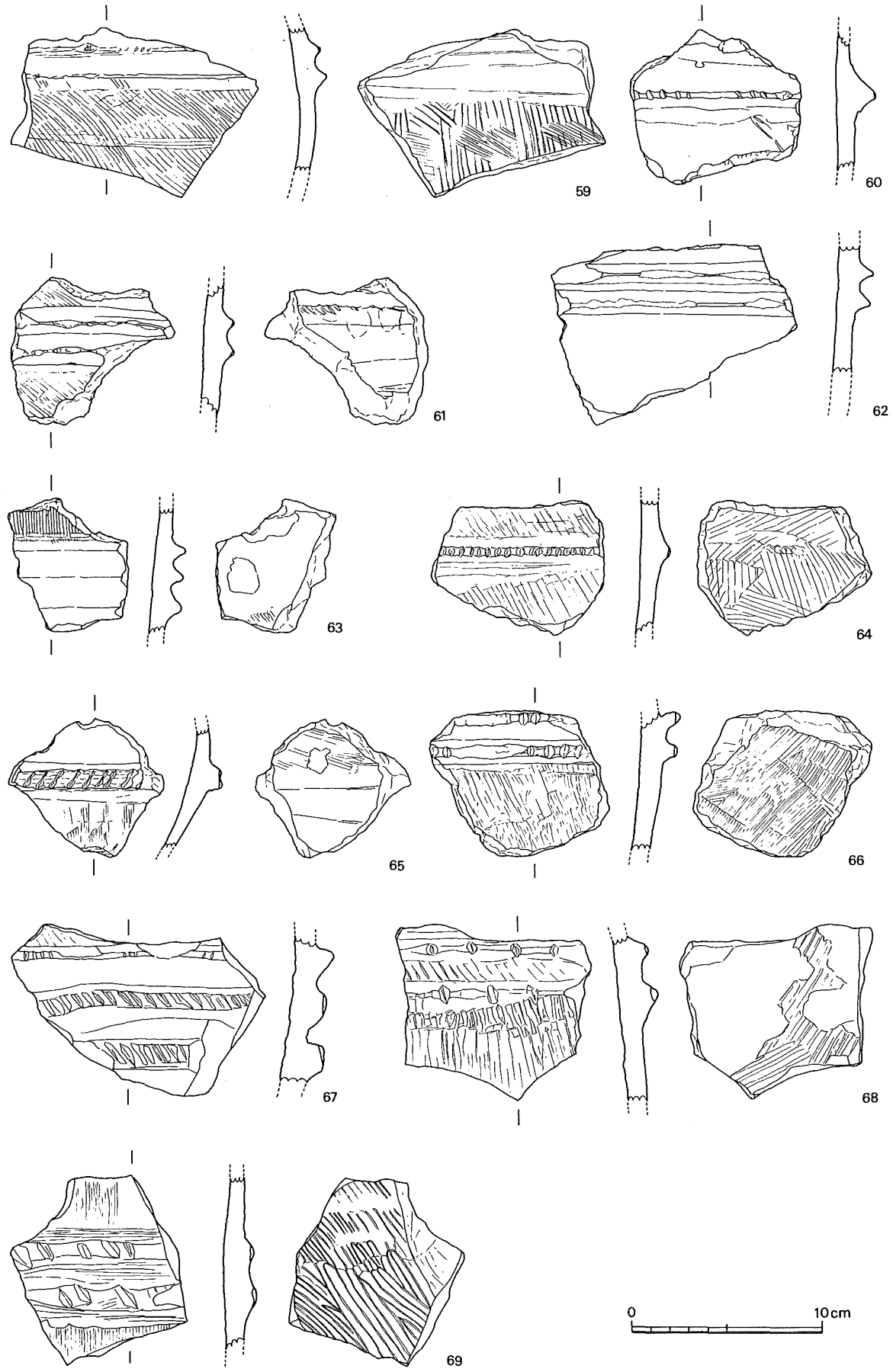
福岡県教育委員会 1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI』中巻



第12図　土　器



第13図　土　器

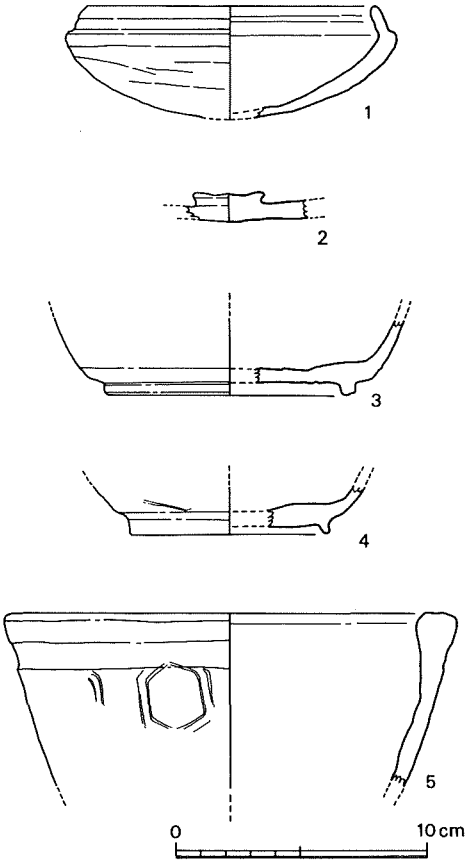


第14図　土　器

第2節　その他の土器

景華園遺跡では弥生時代の他に縄文晩期の土器・須恵器・瓦質土器などが出土している。1は精製の鉢で須恵器の坏を思わせるような形態で，全体を丁寧に研磨し底部を削り出して薄く仕上げている。口縁部は内傾し，内側に1条の段を持つ。縄文晩期中葉以降のものと思われる。晩期の土器は，この他に黒川式土器が数点出土しているがいずれも小片である。2は8世紀代の須恵器の蓋で3・4も同時代のものと思われる。5は中世の瓦質土器である。表面に亀甲文状の文様をスタンプしている。中世の遺物についてはこの1点のみである。今回の調査では，弥生時代のものが主体であり，縄文時代の遺物については数点に止まった。ただし，北側丘陵では弥生時代の包含層とともに残存する可能性が高い。

（福田）

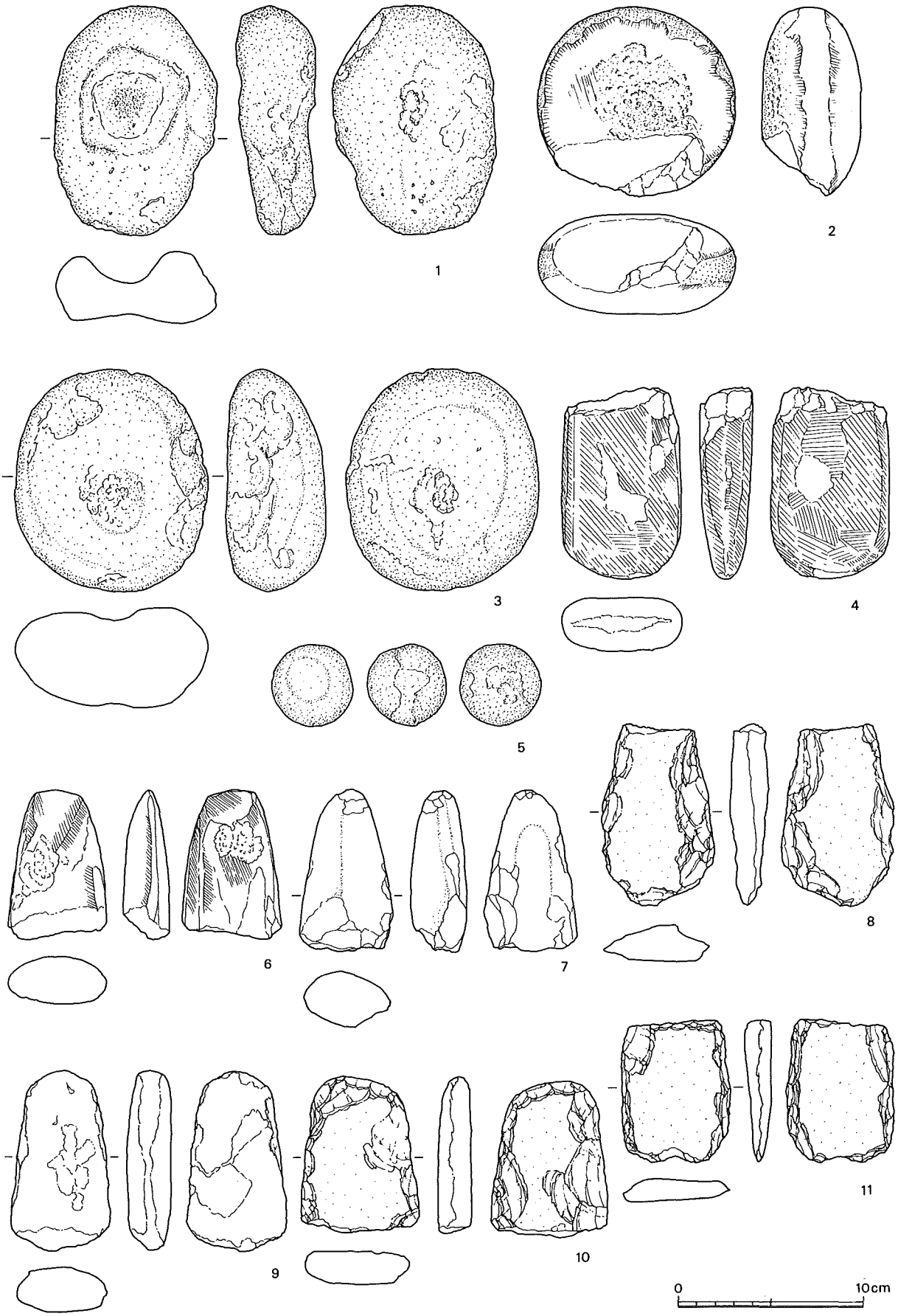


第15図　その他の土器

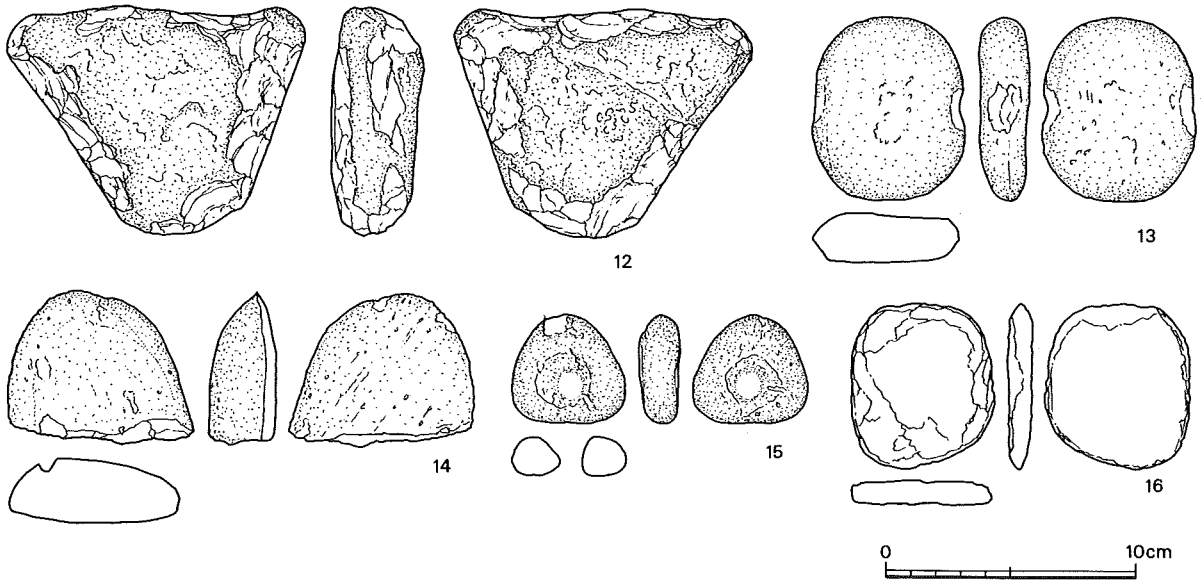
第3節　石器

石器は縄文時代に属すると思われるものが多量に出土している。その多くは28トレンチの近世廃棄土壙からの出土である。この土壙からは弥生時代の土器が多量に出土しているが，石器は比較的縄文時代のものに近く，しかも遺跡出土の晩期のものより古いと考えられるものもある。

16・17図は近世土壙から出土した石器を示した。1～3・5は磨石・凹石・叩き石等である。1の凹石はかなり使用したものと思われ，表裏に窪みがあるが，一端はより使用したものと思われ，かなり窪んでいる。3も表裏に使用痕をもつもので，2点とも凝灰岩を使用している。2は表裏を磨石として使用し，側面は叩いた痕跡が残る。磨り潰す作業と叩く作業が一体となった作業をおこなったことが看取でき，木の実を叩き割り，磨り潰すという作業をおこなったものと思われる。4は頁岩を使用した全面研磨の石斧である。先端部は刃先がかなり潰れており，この時点では伐採などに使用されたとは到底思えない。磨製石斧はこの他6・7・9があり，6・9は赤味をおびた蛇紋岩を使用しており，ほぼ同様の大きさで先端部を欠損する。8・10・11は凝灰岩製の扁平打製石斧で，扁平な素材の周辺にのみ加工を加える。西北九州にあっては，縄文後期の西平式土器以降に発達するもので，大村市富の原遺跡の弥生中期住居址で出土例があるように弥生時代まで存続する石器である。これに対し，北九州地域では縄文後期鐘崎式土器の時期から出土し，弥生時代には衰退していくようである。西北九州では北九州より遅く受け入れられ，北九州よりも遅くまで残る石器である。12～16までは漁



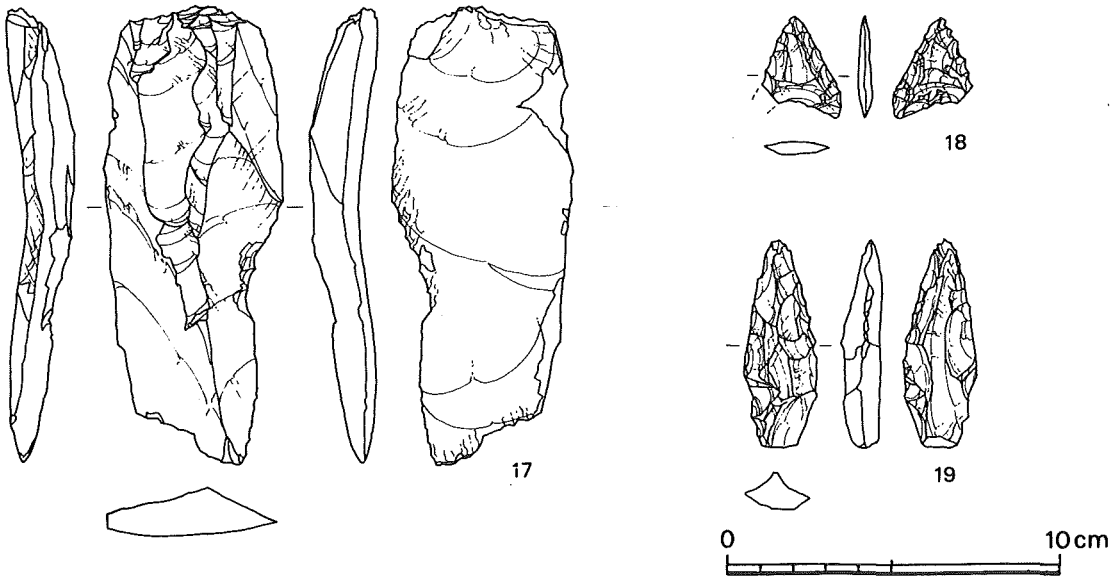
第16図　石　器（1／3）



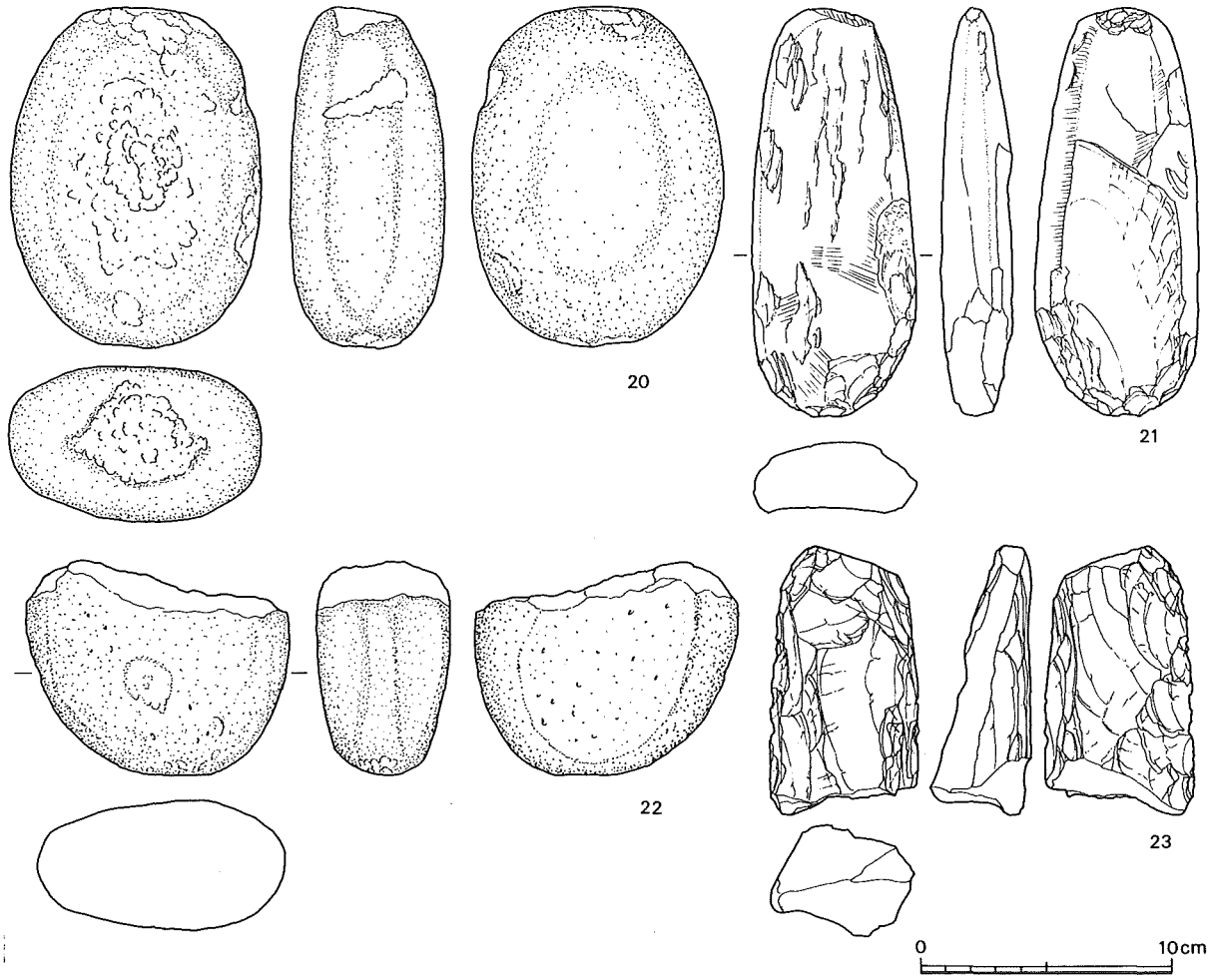
第17図　石器（1／3）

労具と思われる石器である。12は双角状の礫器で加工は周辺加工に止まり，尖った両端には敲打痕が残る。有明海沿岸の遺跡からは多量の礫器が出土しており，カキなどの採取に使用されたものと考えられている。景華園遺跡の東側は直ぐに有明海を望むことができることから，漁撈活動が盛んであったことが想定でき，この石器も貝類の採捕に使われていたのであろう。13・16は石錘と思われる。西北九州の縄文時代の石錘は一般的に重量が重く大きいのに対し，この石錘は小型で側辺の抉りも小さいことを特徴とする。島原半島の石錘を見てみると，縄文時代の石錘は一般的な重量の重い石錘とともに小型の石錘とが共伴することが多いようである。これに対し，五島列島などの外洋の遺跡については大型の礫石錘が多様される傾向があるように思える。島原半島は有明海という干満の差の大きい独特の環境にあり，この環境の中に小型の礫石錘が使用される背景があったのではないだろうか。14・15は軽石を使用したもので，14は半欠しているが断面半円状を呈し，一端を平たく加工している。全体の形状は定かではないが，上下対称となるものであろう。15は三角形状に削ったあとに表裏から穿孔している。浮子と使用されたものか。17～19は剥片石器で共に安山岩を素材とする。17は大型の縦長剥片で，上下からの剥離痕をもつことから両設打面の石核が存在したと考えられる。旧石器時代のものか，縄文時代のものか判然としない。18・19の石鏃は２・３トレンチの表土からの出土で，周辺の遺物や石器の材質から弥生時代の所産の可能性が高い。20～23は31トレンチ出土で，近世の埋土とともに出土した石器である。21の磨製石斧はかなり使いこまれており，23については製作途中のものと思われる。20・22は叩石で表面の中央部でも作業をおこなった形跡がある。

石器は，石斧・磨石・叩石が中心であり，極めて縄文的である。特に蛇紋岩製の石斧については，縄文時代の所産である可能性が高い。本遺跡から出土した縄文土器は少量ではあるが縄文晩期を主体とし，それ以外の時期は認められなかったことから，ほとんどの石器は縄文晩期の所産として捉えることが妥当であろう。（福田）



第18図　剥片石器（2／3）



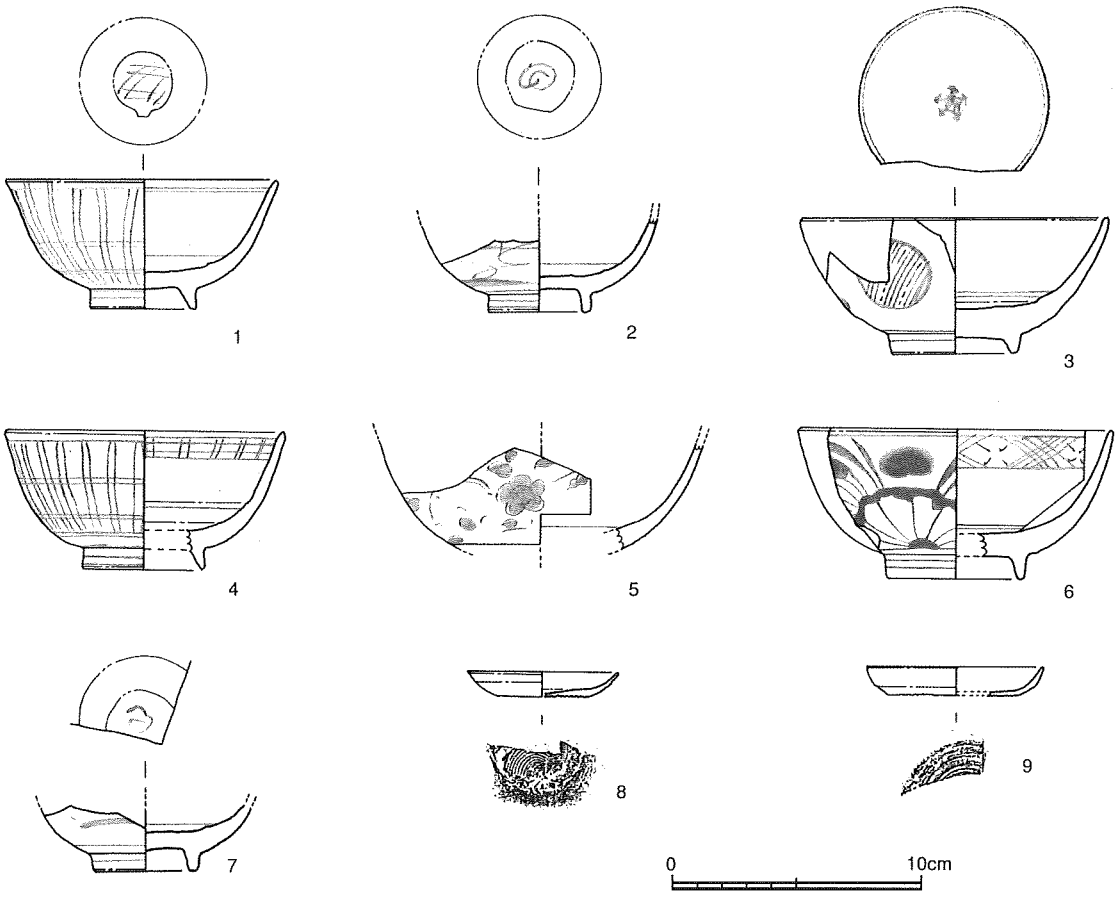
第19図　石　器（1／3）

第４節　近世陶磁

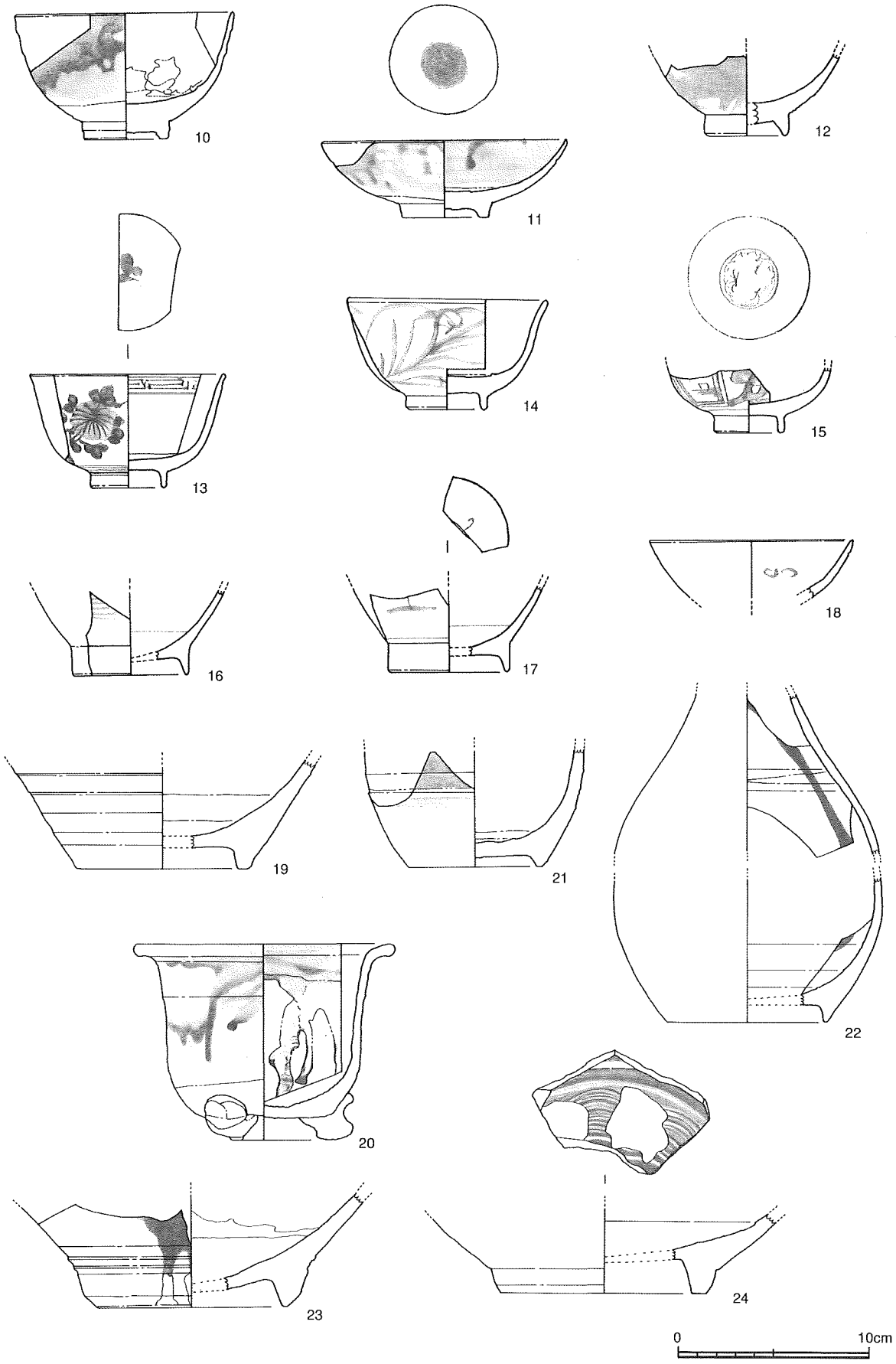
景華園の土地の由来が，藩主の別荘の名称から来ていることは第１章の調査履歴の中でも述べた。これに関連するかどうかは定かではないが，同時期の遺構として28トレンチの廃棄土壙があげられる。土壙からは，多量の弥生土器や石器とともに近世陶磁が出土しており，土壙が江戸時代のものであり，その遺物から19世紀初頭に廃棄壙として利用されていたことが判明した。以下は，出土した近世陶磁の簡単な説明をする。出土陶磁は碗を中心に，壺・擂鉢・捏鉢などの日用雑器類を主体とする。この中で古い一群として，10～12の内野山窯の製品と思われる陶器碗がある。10は青緑釉を体部下半にまでかけ，高台付近は露胎の器高が高い。12も同様であるがゴマ状の白濁した細かい点が見られる。11は茶褐色の釉高台を除く全体にかけ，見込は蛇ノ目剥ぎをおこなう。高台際にはカンナ目痕が見られる。この３点については18世紀前葉頃のものと思われる。その他のものについて18世紀中葉から後葉にかけての碗が主体で16・17の高高台の碗が19世紀中葉と考えれば，その年代幅は約100年ということになる。この28トレンチで確認された廃棄土壙は，19世紀中葉ころに新しい整地作業や廃屋等の整理などのために作られ，その際に周辺の弥生の包含層から出土した土器や，古い陶磁器を一括して廃棄したものと考えられる。　（福田）

参考文献

佐賀県教育委員会 1996『内野山北窯跡』九州横断自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書（20）



第20図　近世陶磁



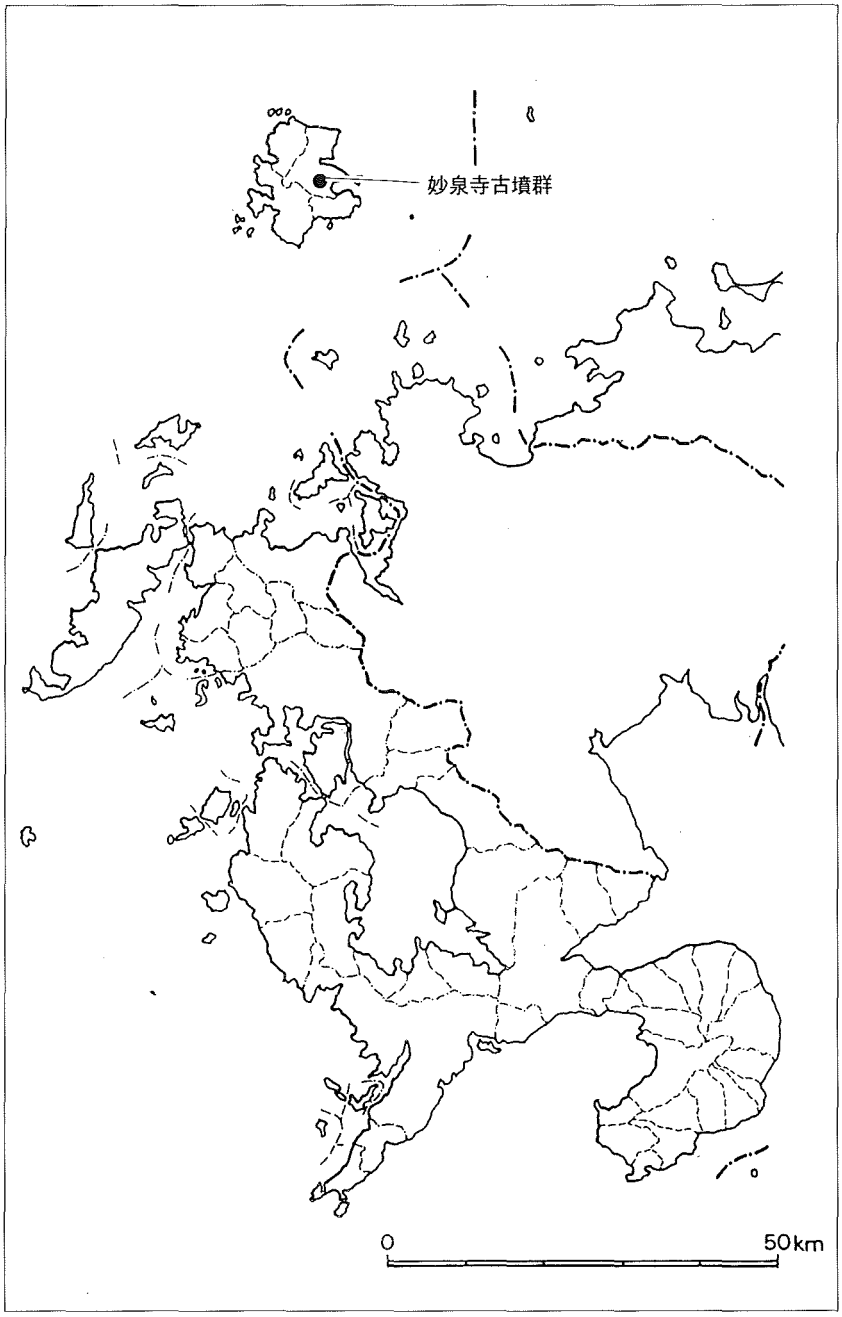
第21図　近世陶磁

第Ⅳ章　まとめ

景華園遺跡については島原半島で唯一の銅剣・銅矛の出土地で，古くから注目された遺跡の一つである。また，現在残されている大石が支石墓ではないかとの指摘等もあり，弥生時代の墓制にも関心が集まるところでもあった。当初から遺跡の研究をおこなってきた古田は，遺跡が既に消滅したことを報告しており，今回はその確認と現状を把握することが主な目的となった。調査の結果，昭和32年の採土が大規模なものであり，遺跡中心部は遺構や包含層さえも削平してしまうほどの規模であったことが判明した。しかし,表土などから出土した遺物から，弥生中期後半を主体とし，後期までの遺物が出土したことや，北九州系の土器や肥後系の土器が出土するなど，有明海を取り巻く地域の幾つかの文化の影響下にあることが判明した。土器の中でも丹塗土器や甕棺などの祭祀や墓制にかかわるものについては北部九州の影響下にあり，その他のものについては中九州的な土器であることなどは，今後，景華園遺跡の弥生社会を考えるときに大きな鍵となりそうである。今後は，北有馬町の今福遺跡などとの比較により北部九州や中九州の影響を受けて成立した景華園遺跡の実像を解明していく必要があろう。遺跡の広がりについては，遺跡の中心部とされる地域以上に北側に範囲が広がることが予想され，今後はこの地域における開発等については十分注意を払う必要がある。

（福田）

第Ⅱ部　妙泉寺古墳群



遺跡位置図

例　　言

1．本書は長崎県壱岐郡芦辺町中野郷東触に所在する妙泉寺古墳群の主要遺跡内容確認調査の報告書である。

2．調査は長崎県教育庁文化課が事業主体となり，芦辺町教育委員会の協力を得た。

3．調査関係者は以下のとおりである。

調査担当　長崎県教育庁文化課　係長　副島和明
同　　文化財保護主事　川口洋平
同　　文化財調査員　荒木伸也
同　　文化財調査員　尾上博一
調査協力　芦辺町教育委員会　文化財指導員　松永泰彦
同　　文化財指導員　山口優

4．遺物の実測は網谷泰代，川村由美子，松尾美代子，森崎京子の協力を得た。製図は近藤千鶴，斉藤いづみ，田中由美子，渡辺洋子の協力を得た。

5．本書の執筆はⅠ・Ⅱ章を副島が，Ⅲ章を川口・尾上が，Ⅳ章を尾上がおこなった。

6．本書の編集は尾上がおこなった。

本　文　目　次

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境 …… 30
第Ⅱ章　調査の経緯 …… 32
第Ⅲ章　調査内容 …… 33
1　調査の目的と方法 …… 33
2　調　　査 …… 34
（1）1号墳 …… 34
（2）3号墳 …… 40
（3）2，5号墳 …… 43
第Ⅳ章　総　　括 …… 46

挿　図　目　次

第１図　妙泉寺古墳群および周辺の遺跡位置図（Ｓ＝１／5,000　Ｓ＝１／25,000）…… 31
第２図　妙泉寺古墳群位置図（Ｓ＝１／1,000）…… 33
第３図　１号墳墳丘実測図（Ｓ＝１／200）…… 36
第４図　１号墳石室実測図（Ｓ＝１／50）…… 37
第５図　１号墳出土遺物（Ｓ＝１／３）…… 38
第６図　１号墳出土遺物（Ｓ＝１／３）…… 39
第７図　３号墳出土遺物（Ｓ＝１／３）…… 40
第８図　３号墳石室実測図（Ｓ＝１／50）…… 40
第９図　３号墳墳丘実測図（Ｓ＝１／200）…… 41
第10図　３号墳石室実測図（Ｓ＝１／50）…… 42
第11図　２号墳墳丘実測図（Ｓ＝１／200）…… 44
第12図　５号墳墳丘実測図（Ｓ＝１／200）…… 45

表　目　次

表１　周辺の遺跡一覧 …… 30

図　版　目　次

図版１　１号墳 …… 63
図版２　１号墳出土遺物 …… 64
図版３　１号墳石室 …… 65
図版４　１号墳石室 …… 66
図版５　１号墳石室 …… 67
図版６　２号墳，１号墳調査風景 …… 68
図版７　３号墳 …… 69
図版８　３号墳 …… 70
図版９　１号墳出土遺物 …… 71
図版10　１号墳出土遺物 …… 72

第Ⅰ章　遺跡の立地と環境

壱岐島は，長崎県の北部に位置し，対馬海峡と壱岐水道の間にあり，玄界灘に浮かぶ東西約15km，南北約17kmの面積が約138km²のやや南北に長い島で，21の属島からなる。海岸線は発達した海触崖がみられる北東部を除けば出入りが多く，大小の湾入がある。壱岐は，三世紀の中国の歴史書『三国志』魏書東夷伝倭人の条「魏志倭人伝」に「一支国」と記載され，その中心集落が原の辻遺跡であることはこれまでの発掘調査で明らかで，大陸との関係を示す遺構・遺物等が多量に出土している。また，地理的にも中国大陸及び朝鮮半島と本土部との交通の要所として，歴史的に日本の西端として重要な位置を占めている。

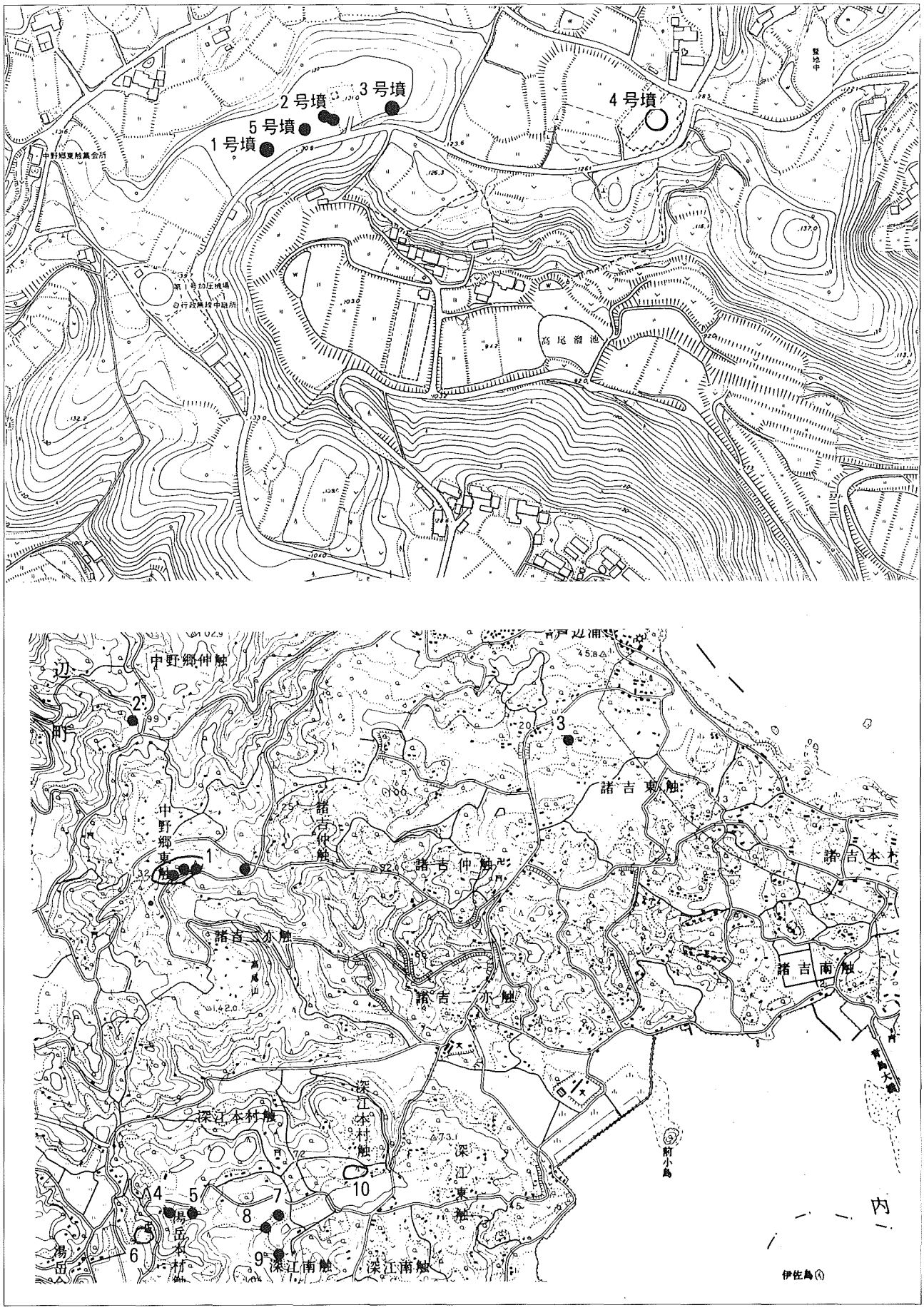
妙泉寺古墳群は，島の中央部のやや東側に当たり，高尾山（標高約142m）から派生する北側丘陵上に位置し，稜線に沿って町道高尾線が走るその道路沿いの標高約126m～134mの間に現在４基の古墳群が立地する。（昭和27年８月の東亜考古学会の調査時の当古墳数は，「10基余りの円墳が散在。その内には破壊され石室の天井石露出しているものも２，３あった」。との記録がある。）壱岐は旧石器時代から中世，近世にかけての遺跡が475箇所を数え，弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多いのが特徴である。旧石器時代の遺跡は，原の辻遺跡，鶴田遺跡，車出遺跡等でナイフ形石器・台形石器が出土し，ナイフ形石器から細石器を主体とする石器群があるが全容は不明である。縄文時代は松崎遺跡，名切遺跡，鎌崎遺跡等島の西海岸地帯に主に所在している。弥生時代は，原の辻遺跡やカラカミ遺跡，車出遺跡等大規模な環濠集落を形成している。次ぎの古墳時代に於ける遺跡の在り方とも併せ，日本の西端地域の防衛上での拠点として中央政権との関係を示す重要な遺物が出土している。古代から中世にかけては，壱岐直の氏寺を転用した嶋分寺跡，串山ミルメ浦遺跡，木簡や陶磁器類が出土した原の辻遺跡等重要な遺跡がある。古墳時代における壱岐は，前方後円墳12基と円墳等の確認総数は264基を数える。特に古墳数は，寛保７年平戸藩主松浦誠信による『壱岐国続風土記』によると338基の記録と平戸藩主松浦静山による『甲子夜話』によると296基が記載されているので，古墳の基数については現在より数多くの古墳が確認されていることになる。また，壱岐における古墳の発掘調査としては，安政２年に安国寺の住職白華和尚によって寺の裏山にある大塚山古墳（芦辺町）が発掘され，石室の状況や瓦泉１点の出土が詳細に古文書として残されている。その後の調査は，鬼の窟古墳・大塚山古墳・カジヤバ古墳・笹塚古墳等わずか10数例で大部分の古墳は墳丘，石室等の実測調査が実施されておらず詳細は不明である。

島内の古墳は，原の辻遺跡を見下ろす丘上に築かれた竪穴系横口式石室構造をもつ大塚山古墳（円墳）が古く５世紀後半に位置づけられる。

６世紀以降の古墳は，島の中央部分を中心に県内最大級の前方後円墳（全長約93m）の双六古墳，

１：妙泉寺古墳群	２：大平野古墳	３：東我郎古墳	４：覩上山１号墳	５：覩上山２号墳
６：定光寺前遺跡	７：堂山１号墳	８：堂山２号墳	９：堂山３号墳	10：深江本村遺跡

表1　周辺の遺跡一覧



第1図　妙泉寺古墳群および周辺の遺跡位置図（5千分の1、2万5千分の1）

県内最大級の円墳の鬼の窟古墳（径約45m），金銅製の馬具類を出土した笹塚古墳，兵瀬古墳（円墳），対馬塚古墳（前方後方墳）等を含め石室の構築に巨石を用いる古墳が多く集中し，ドーム状の石室で線刻画をもつ百田頭５号墳等が集中している。（副島）

第Ⅱ章　調査の経緯

平成11年度にふるさと古代遺産保存継承事業・主要遺跡内容確認調査の一環として，２つの遺跡についての範囲確認調査を実施し，その内の一つが妙泉寺古墳群である。

長崎県内の古墳は，前方後円墳23基，前方後方墳１基，円墳の469基を数え，その内壱岐の古墳は前方後円墳12基と円墳等の確認総数は264基を数える。特に，壱岐島の面積は県土のわずか約３％（約138㎢）を占める程小さな島であるが，県内の古墳数の約６割を占める基数が存在している。このことは壱岐地方に於ける古墳時代の社会情勢が，長崎県の壱岐・対馬と中国大陸及び朝鮮半島との対内外交渉，防衛等での拠点としての重要性が看取される状況下での在り方と考えられよう。

長崎県教育委員会は，国宝重要文化財等保存整備費補助事業の一環として，平成元年から平成３年度の３ヶ年間に渡り県内の主要な古墳の内12箇所の古墳について，県内古墳詳細分布調査（対象古墳は，壱岐９基・対馬１基・北松浦１基・南高１基の計12古墳）を実施した。その際，県内において過去の古墳の調査例が極端に少なく，全容が不明のために調査対象を主要な前方後円墳と大規模な円墳に焦点を当て選定し実施した結果，調査した古墳の大半が壱岐島に集中した。

今回実施した妙泉寺古墳群は，昭和23年から昭和26年に至る東亜考古学会，九学会連合対馬共同調査委員会，日本考古学協会による対馬・壱岐を対象とした学術調査が継続的に実施され，縄文時代から古墳時代の遺跡についての様相が明らかにされた。この一連の調査時における壱岐の調査は，昭和26年から29年・36年に原の辻遺跡を中心に実施され，その他にカラカミ遺跡，閨繰遺跡，妙泉寺古墳群の発掘調査が実施された。

妙泉寺古墳群の調査は，妙泉寺古墳１号墳・７号墳の２基について実施され，１号墳の封土から杯10点・高坏１点・提瓶１点，入り口前からガラス玉３点，羨道部分から馬具片・ガラス玉１点，石室から須恵器片が出土し，また７号墳から須恵器・土師器・鉄刀・鏃・金環・ガラス玉・鉄製辻金具・ホ具が出土していることが報告されているが，古墳の調査状況や遺物の出土状況等報告がなされていないので，詳細は不明である。今後の関係者の調査報告を待ち，遺跡の位置づけをする必要があると考えている。当調査報告書に記載した妙泉寺古墳群は，現在１号墳から５号墳まで確認されており，その内４号墳は無断開発で消滅している。東亜考古学会の調査時での１号墳・７号墳と現在の古墳との整合性については，今の所確認は出来ていない。

今回の調査目的は，妙泉寺古墳群の様相が不明なため，まず墳丘測量図作成と石室実測図作成及び石室実測のための清掃・確認調査を実施し，基礎資料を得ることと第２号墳が前方後円墳あるいは円墳であるのかの確認も含めておこなった。（副島）

第Ⅲ章　調査内容

1調査の目的と方法

今回の調査は，長崎県が実施している主要遺跡内容確認調査事業にともなうもので，遺跡の現状およびその内容を新たに確認することを目的とする。1998年８月17日から９月17日まで実施した。

妙泉寺古墳群は確認されている５基のうち，４号墳が消滅しており，１号墳，２号墳，３号墳，５号墳を残すのみである。この現存する４基に対して墳丘測量をおこない，石室の開口する１，３号墳については石室実測および，羨道部と石室床面のクリーニングも実施した。

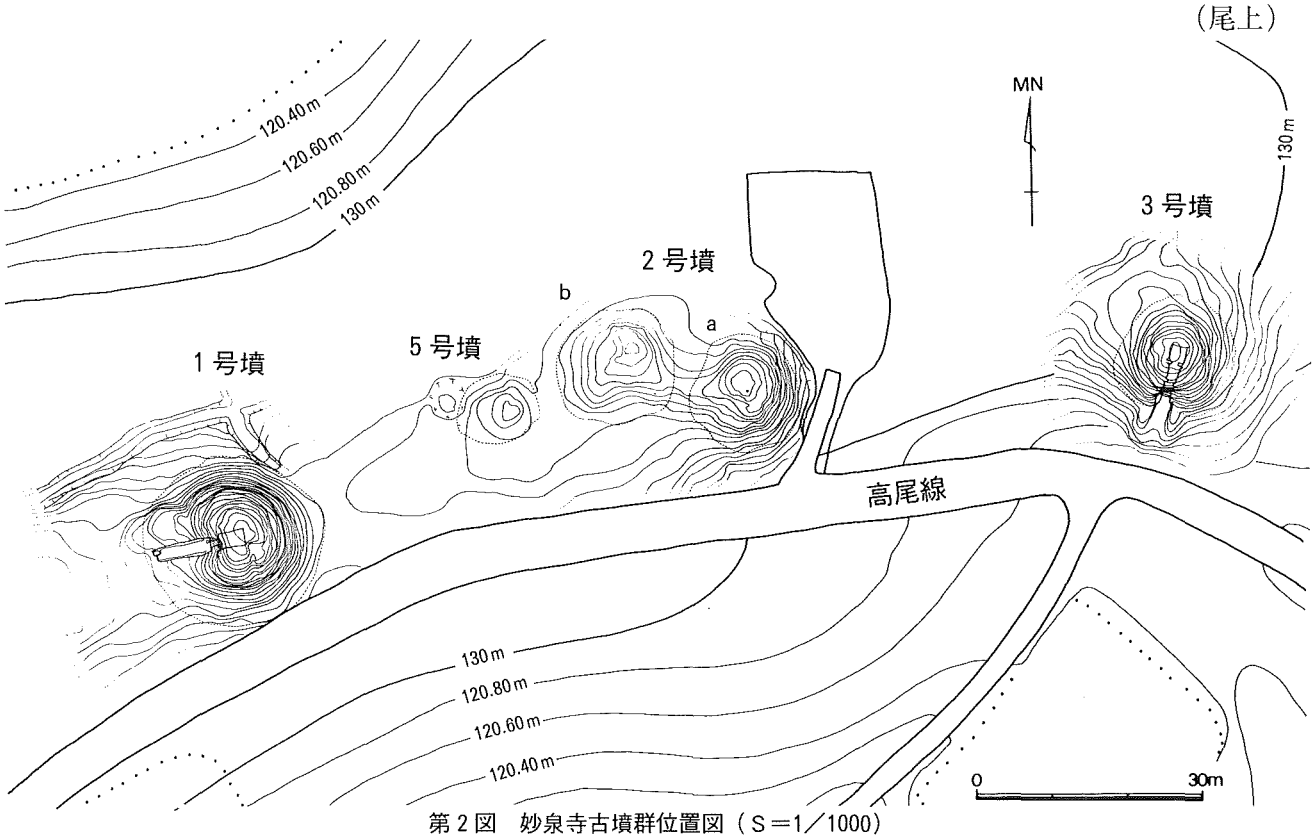
調査にあたっては，古墳群のある丘陵部が草や樹木により厚く覆われていたため，鉈や鋸で伐採作業をおこなった。平行してレベル移動をし，障害物の除去が終了した古墳から順に測量用のポイントとなる杭を打ち，設定を進めた。

１号墳墳丘の裾に近い羨道部分は近年，重機によって掘削され，攪乱されていた。そのため構造については確定が困難であるが，掘削溝に堆積する廃棄物を除去した後，石室中心線に沿って2m×7mのトレンチを設定し，壁面の土層観察による版築構造の確認と遺物の検出につとめた。

墳丘測量ならびに周辺の地形図は１／100の平板実測とし，25cm間隔で等高線をいれた。

１号墳石室は，細かい石材を使用していたため，１／10で実測図を作成した。石室内は堆積土の除去と遺物の検出，床面検出を目的に精査作業を実施した。

３号墳は石室の構築材に巨石を用いており,実測は１／20でおこなった。石室内は床面確認を所期の目的として精査した。



第２図　妙泉寺古墳群位置図（Ｓ＝1／1000）

2 調査

（1）1号墳

墳丘（第3図）

W-13°-S方向に開口する単室両袖構造の横穴式石室で，現存する4基の妙泉寺古墳群内で西端に位置する。

円墳で，径約23m，墳丘高約5.2m，墳丘頂の標高は138.7mを測る。攪乱による影響か，石室開口方向の盛土は下に流れ落ちており，墳頂部が東西へ偏平につぶれ，等高線が楕円を描く。西側墳裾はゆるやかに丘陵平坦部に続いている。この付近は先述した近年の攪乱による影響でかなり墳丘形態が変形している。石室中心線に沿って設定したトレンチの断面観察からみると，赤褐色と橙色，褐色の粘質土を10～20cm厚で重ね，版築をおこなっている。

南方に溝状の道がめぐるが，周溝の可能性もある。（尾上）

主体部（第4図）

墳丘の裾に近い羨道部分は近年，重機によって掘削され，攪乱されていた。

そのため構造については確定が困難であるが，掘削溝に堆積する廃棄物を除去した後，石室中心線に沿ってトレンチ状に掘り下げ，改めて壁面を精査し，版築の構造など土層観察をおこなった。

羨道部につながる石室入口は左壁に高さ約80cm，幅約120cm，厚さ約10cmの板石をたて，右壁には高さ約90cm，幅約130cm，厚さ約15cmの板石をたてる。その板状立石上に，右壁側はさらに板石を横積みし，右壁側には細かな割石を積んで高さをそろえ，125cm×80cm，厚さ35cmの板石を両壁に渡して入口天井部を形作る。

この羨道部端は壁の石が抜けた様子があり，築造当時は現状より若干外に伸びていた可能性もある。ただしトレンチの土層断面からは，黒褐色土が入口を被覆するように堆積する状況が観察できる。このことからさほど遠く離れた位置でなく閉塞されていたことが推測される。なお，入口の底面と思われるところには石材の一部であろう礫や板石が，精査にともない出土した。あるいは閉塞石の一部かもしれない。

玄室へは標高134m近くから約40cmほど傾斜して坂を下って至る。

石室内から見ると玄室入口は，先述の板状立石の裏に細かな割石を小口積みし，壁面を構成する。玄室の天井石とその一つ下にある石との間には空隙があるが，壁面の構成材が後に抜け落ちたのか，意識して空間を取ったのかは明確でない。

玄室は3.4m×2mの長方形プランで，天井高2.3mを測る。奥壁に幅2.1m，高さ2mの，表面に粗く調整を施した巨大な自然石を一枚立てる。壁体下部には左側壁に幅1～1.2m，高さ60～80cmの腰石を3石，右側壁には奥から幅1.4m高さ1mを1石，幅1.5m，高さ50cmを1石，玄門部近くに幅30cm，高さ50cmのやや小型のものを1石，計3石を配する。

腰石上は右側壁が5～6段の石積みをおこない，左側壁が4～8段の石積みをおこなって壁体を構

成する。石室石材は面取り調整はあまり施されず，個々の大きさにもやや差異があり，石室全体に精緻な感は薄い。右側壁は外部上方からの土圧によるものか，中央の腰石に向かって傾斜するように乱れ，一部の石材は割れている。全体としても石室内側に石材が突出ぎみで，外圧を想起させる。　側壁には数カ所で縦目地および横目地が通る。積み上げに際しては5cm角程度の小礫や薄い板石を割石の間に補填し，高さを調整しながら数度に分けて構築しているようである。

コーナーは各壁に対して斜めに石を重ね，隅を消している。また天井部まで徐々に幅が減少する持ち送り構造である。

天井は入口のものも含めると3枚の天井石で形成するが，各々を互いにかみ合うようにはするものの，直接には重ねない。いずれの天井石も入口方向に傾斜する。

本石室の特徴は玄室の壁面全体に赤色顔料を塗布している点である。石室入り口付近は外気との接触が多いためか顔料が色あせてしまった感があるが，内部とくに奥壁では鮮やかに艶のある色彩を保っている。

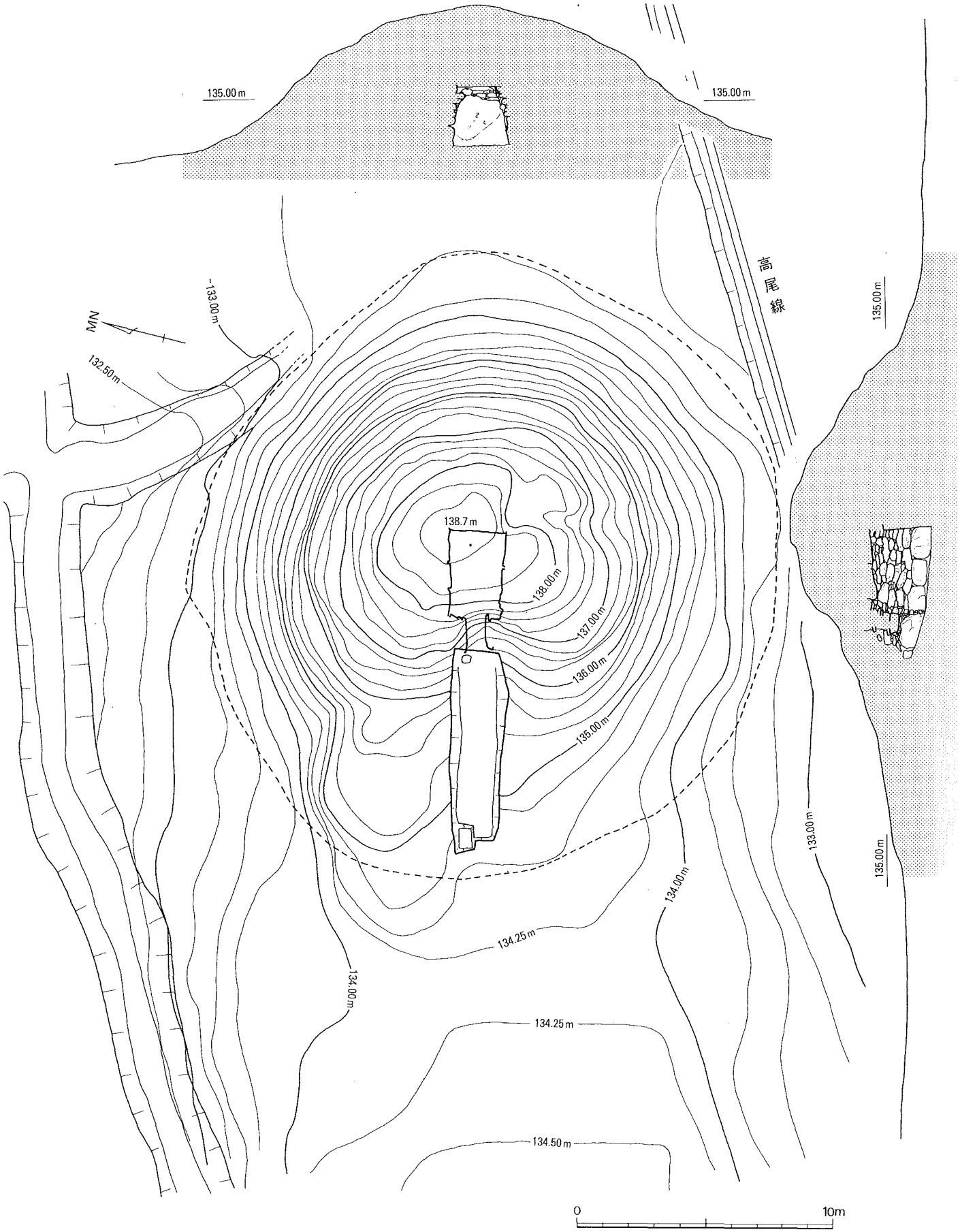
床面には3cm前後の玉砂利を一面に敷く。ただし，羨道部付近の墳丘の状況やトレンチの精査内容から，本古墳は過去に盗掘等であらされた形跡があり，この砂利も原位置を保つものではないとみてよいであろう。　（尾上）

出土遺物（第5・6図）

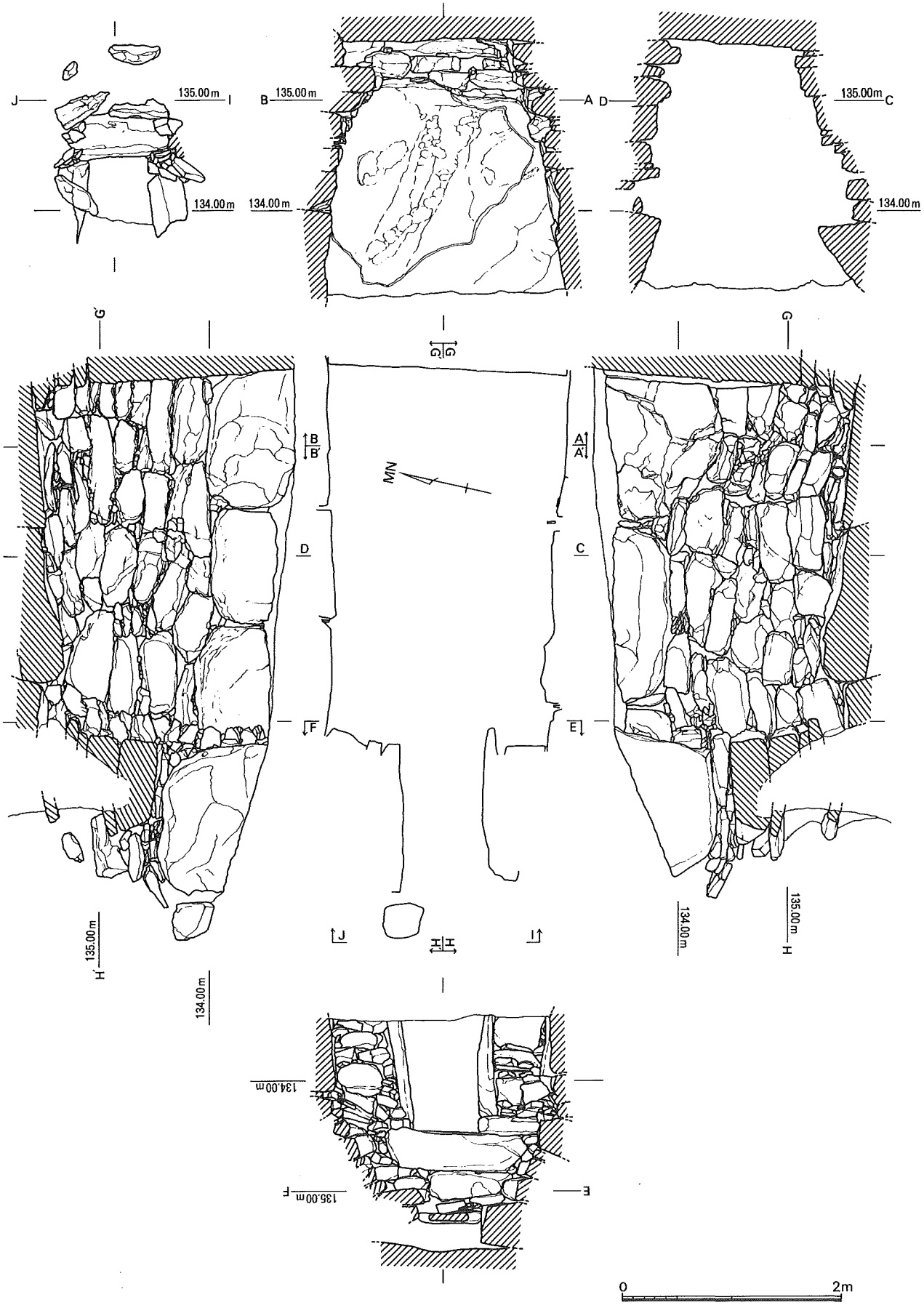
遺物は石室内から出土した須恵器片1点を除き，すべて羨道部のトレンチから出土した。

1・3は金銅製金具。2は金銅製耳環である。4・5は須恵器の甕口縁部と頸部である。5は内面の頸部と胴部の境界にユビオサエのあとがよく残る。胴部の内・外面には当て具痕とタタキ痕が明瞭に残る。頸部に太めの沈線を引き，2段の斜行連続文を施す。6は須恵器甕の胴部。内外にタタキのあとがよくのこる。7・8は須恵器坏蓋。焼成は甘い。坏蓋はいずれも灰白色から白っぽい灰色である。9は須恵器高坏。焼成は良好。10は瓶の口縁部。11はハソウの口縁部。12は坏蓋。焼成は甘い。13は高坏形の須恵器器台坏部。口唇部は外方にゆるやかにまがる。口唇部は外傾し，外につまみ出したような形状を呈する。坏部外面上半にカキメを施した後に上から5分の1ほどのところに2条，さらにその下に1条の沈線を施し，その間に櫛歯状の工具による，振幅のあまり大きくない波状文を施して2段の施文区画帯を構成する。内面の当て具痕はすり消しによりあまりよく残らない。外面のタタキの残りは良好である。内面に緑色の自然釉がかかる。焼成は良好。14は器台脚部で，外面に緑色の自然釉がかかる。脚の区画上に斜行連続文が施される。施文は連続しているため，波状に施文具の移動痕が残る。15は須恵器長頸壺の頸部である。口縁部と胴部が欠損しているとみられる。全体にカキメ調整をおこない，その上から口縁下に2条の沈線を引く。この上下に，櫛歯状の施文具による波状文を施す。波状文はゆるやかで振幅はあまり大きくない。

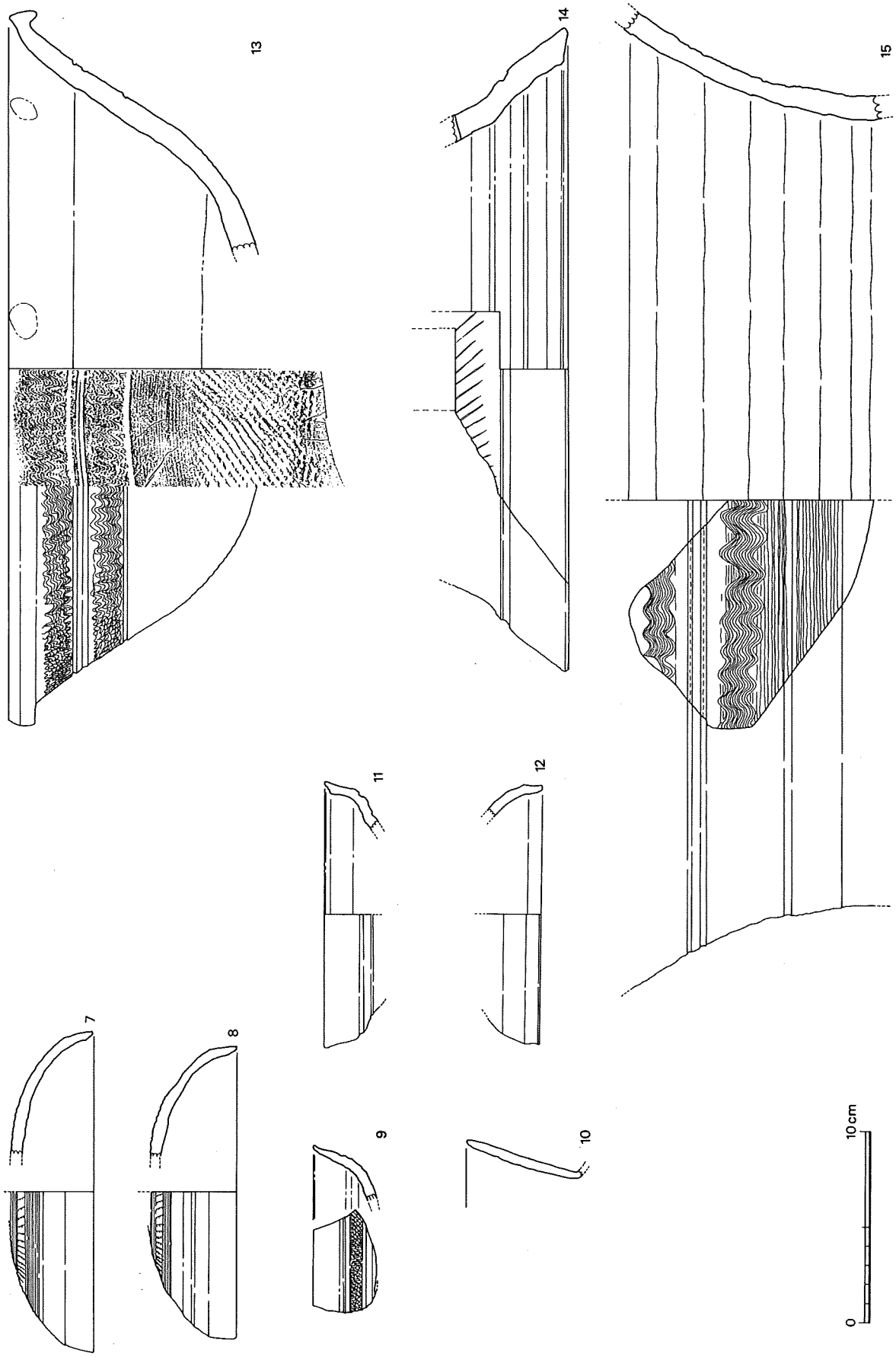
（尾上）



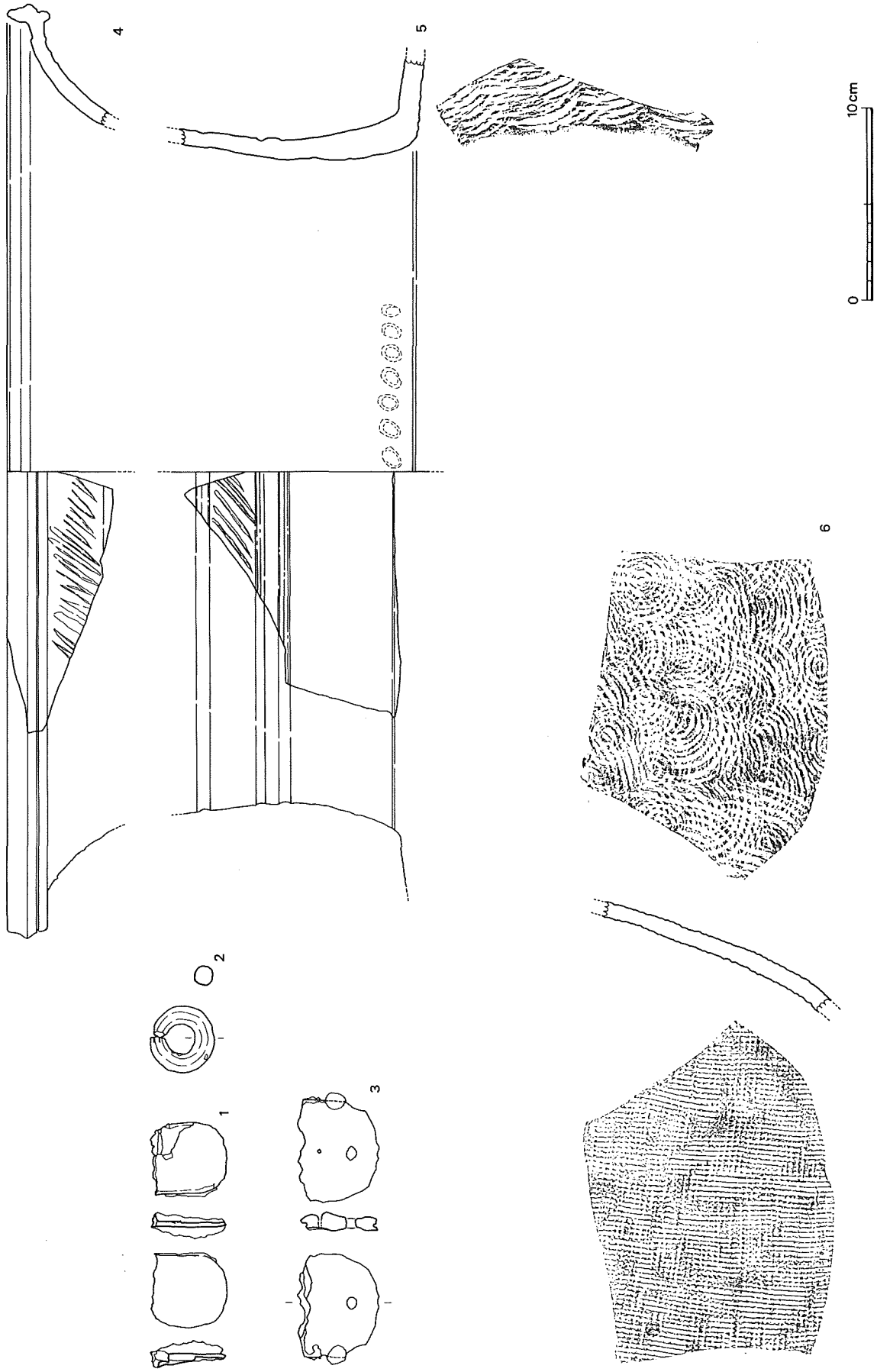
第3図　1号墳　墳丘実測図（S＝1／200）



第４図　１号墳石室実測図（Ｓ＝1／50）



第５図　１号墳出土遺物（Ｓ＝1／3）



第６図　１号墳出土遺物（Ｓ＝1／3）

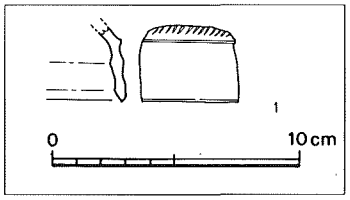
（２）３号墳

墳丘（第８図）

妙泉寺３号墳は，古墳群の最も東側に位置する円墳で，標高125～129mの斜面に位置し，北北西の谷側に石室が開口している。現状は山林となっている。墳丘の裾は，現況では直径約20m程度であるが，石室の入口や測量図面などから，築造当初は，図中破線のように直径約15m程度ではなかったかと推測される。墳丘の高さは，石室床面から墳丘頂までの高さは約4.6mで，墳丘頂の標高は131.9mである。

主体部（第９図）

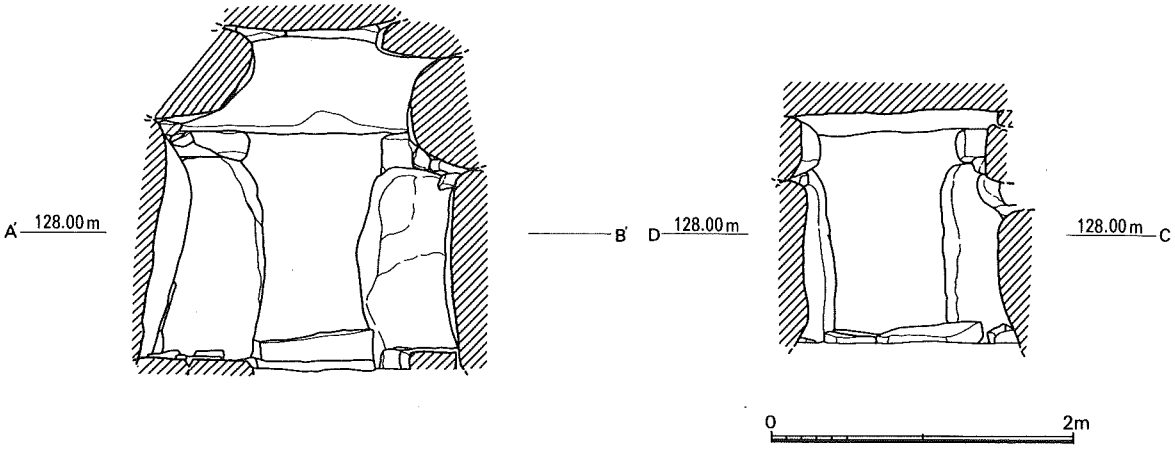
主体部は，N-17°-Eに主軸をとる横穴式石室で，北北西側に開口している。石室は，前室と玄室からなる両袖式の複式構造で，現存する石室の全長は8.1mである。玄室では，奥壁に幅2.1m，高さ2.2mの巨大な岩を使用している。側壁は，開口部を向いて右側の幅（奥行き）が2.1m，同左側が2.0m，玄門側は，幅2.0mを測る。以上から玄室の平面プランは，ほぼ２m×２mの正方形であるということができる。玄室天井部は，玄門側半分に，高さ1.5mで前室から連続して積まれている。奥壁側の半分は，高さ2.1mと高くなっている。玄室の床面には，不定形の切り石が石畳状に敷かれているが，玄室中央部では盗掘によるものか，はがされて原位置をとどめていない。石棺および棺材も確認することはできなかった。なお，右側壁に線刻状の凹線がみられたが，検討の結果，岩のひびと判断した。前室は，玄室側幅1.6m，右壁幅1.7m，左壁幅2.1m，羨道側幅1.4mで，崩れた平面プランとなっている。床面には，一部に敷石状の平たい石がのこるが，敷きつめられていたかどうかは不明である。羨道部は，石の採掘によるものか，両壁の先端部がずれている。



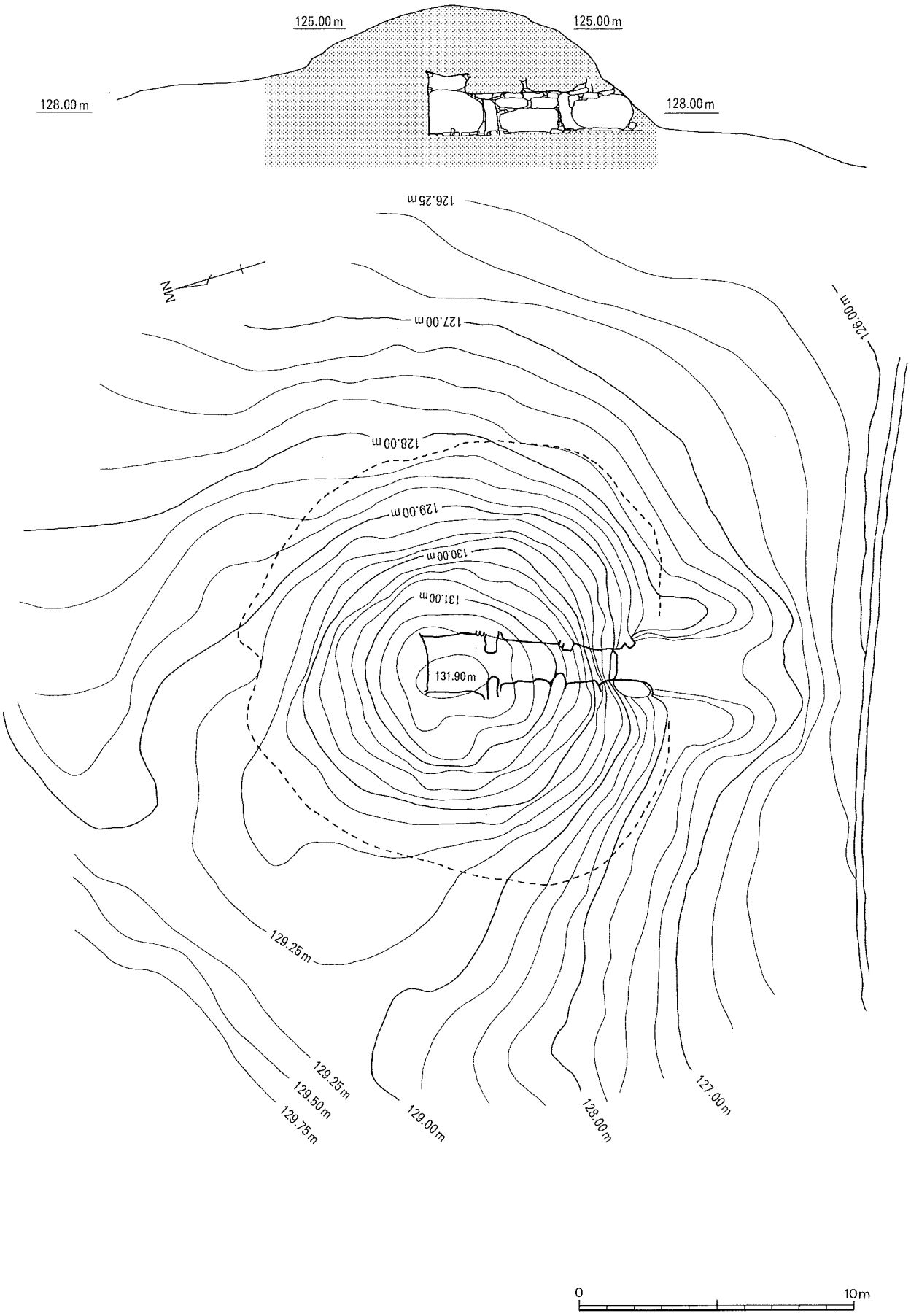
第7図　３号墳出土遺物（S＝1／3）

出土遺物（第７図）

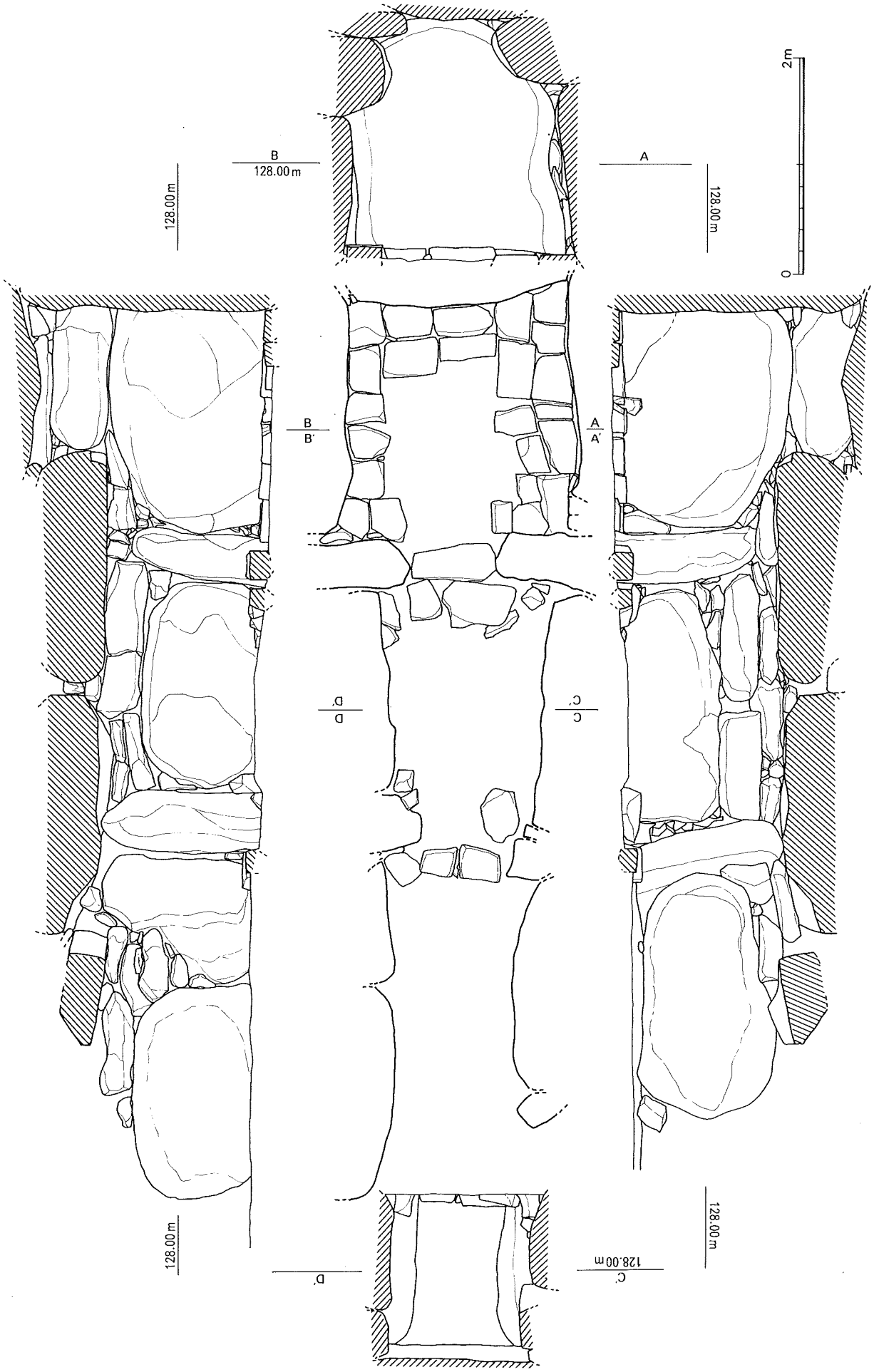
１は，須恵器の杯蓋で，前室の床面から出土した。表面灰白色で，焼成は良好である。体部中位に凸帯が巡り，その上に櫛状の原体による斜文が連続して施される。　（川口）



第８図　３号墳石室実測図（Ｓ＝1／50）



第９図　３号墳墳丘実測図（Ｓ＝1／200）



第10図　3号墳石室実測図（S＝1／50）

（3）2，5号墳

墳丘

2号墳（第10図）

2号墳は3号墳の西に空き地を挟んで位置する。以前は1基の円墳として認知されていた。今回の調査により，径約15mの円墳が2基連接して築造されている可能性が高くなった。便宜的に2基のうち東側にある空き地寄りのマウンドを2a（以下a）とし，西側のマウンドを2b（以下b）と呼ぶことにする。

本調査は測量を主とした内容確認調査で，石室の調査は入口が開口する1号墳と3号墳に限って実施している。2号墳も含めた他の古墳に関しては墳丘測量のみで，トレンチ等による古墳内部の確認はない。したがって「2号墳」の石室の存否を含む墳丘内の状況は未知であり，円形のマウンドが連結した一つの古墳であるのか，独立した2つの円墳であるのかは断言できない。等高線のラインからみると，a号墳とb号墳は標高134.75mから134mで，連結しているようであるが，墳丘全体の形状やフォルムからやはり別個のもの考えるのが妥当であろう。くわえて墳丘標高135.25m前後にaは南西に，bは西に凹がみられる。開口する2基の墳丘から類推して，あるいはこれがa・bの石室入口の方向と一致するのではないかと考える。

以下，各々を別個の墳丘とみた記述をおこなうことにする。

aは墳頂高136m，墳丘高2m～3.25mを測る。

東と南は高尾線等の道で削られ，墳裾からすぐ下が崖のようになっているが，もとは3号墳まで連続した地形であった。

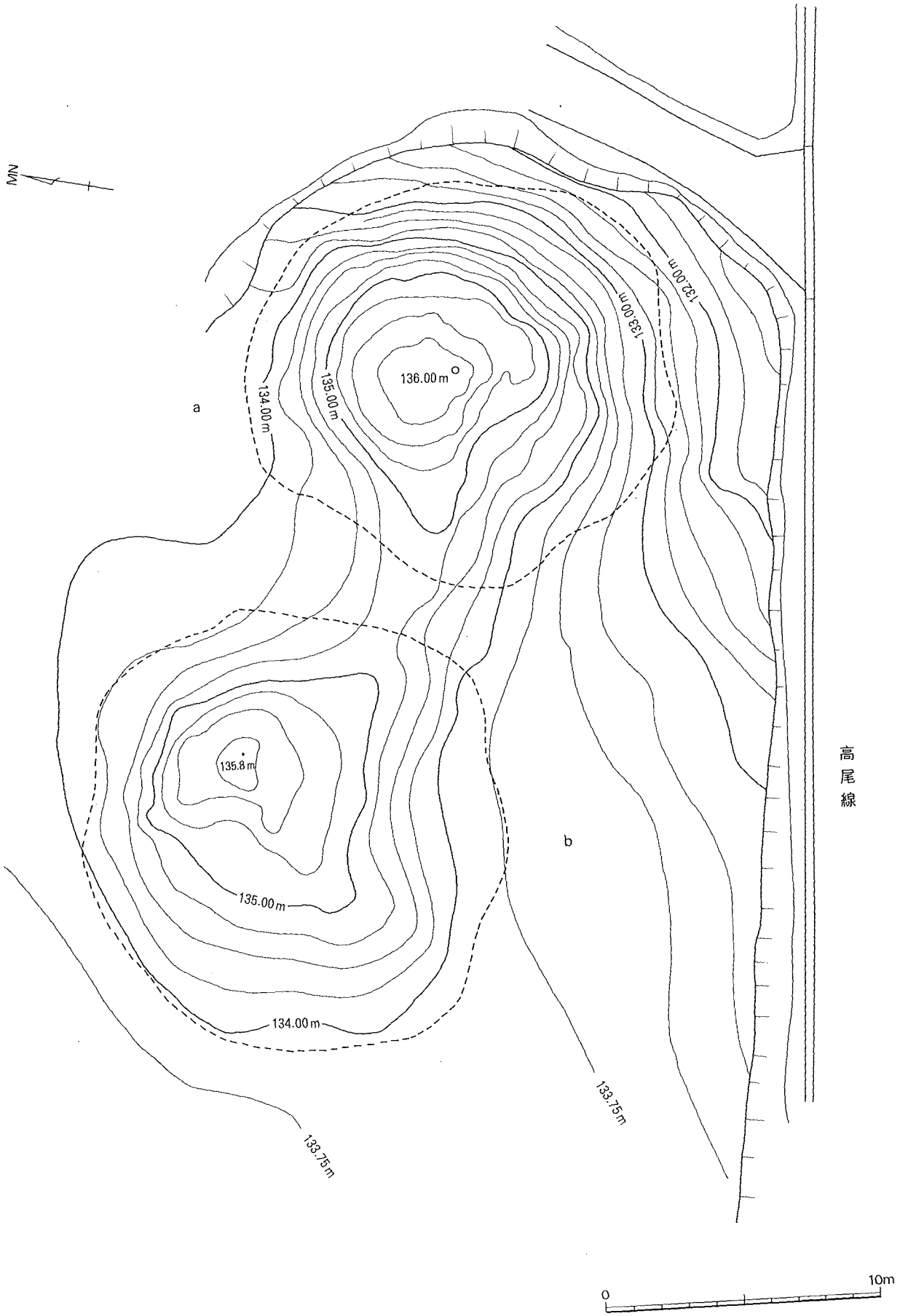
bは墳頂高135.8m，墳丘高1.8mを測る。

aとは東を標高134m～134.75mで連接する。墳頂がやや北に寄り，道路側が緩やかな傾斜をとる。

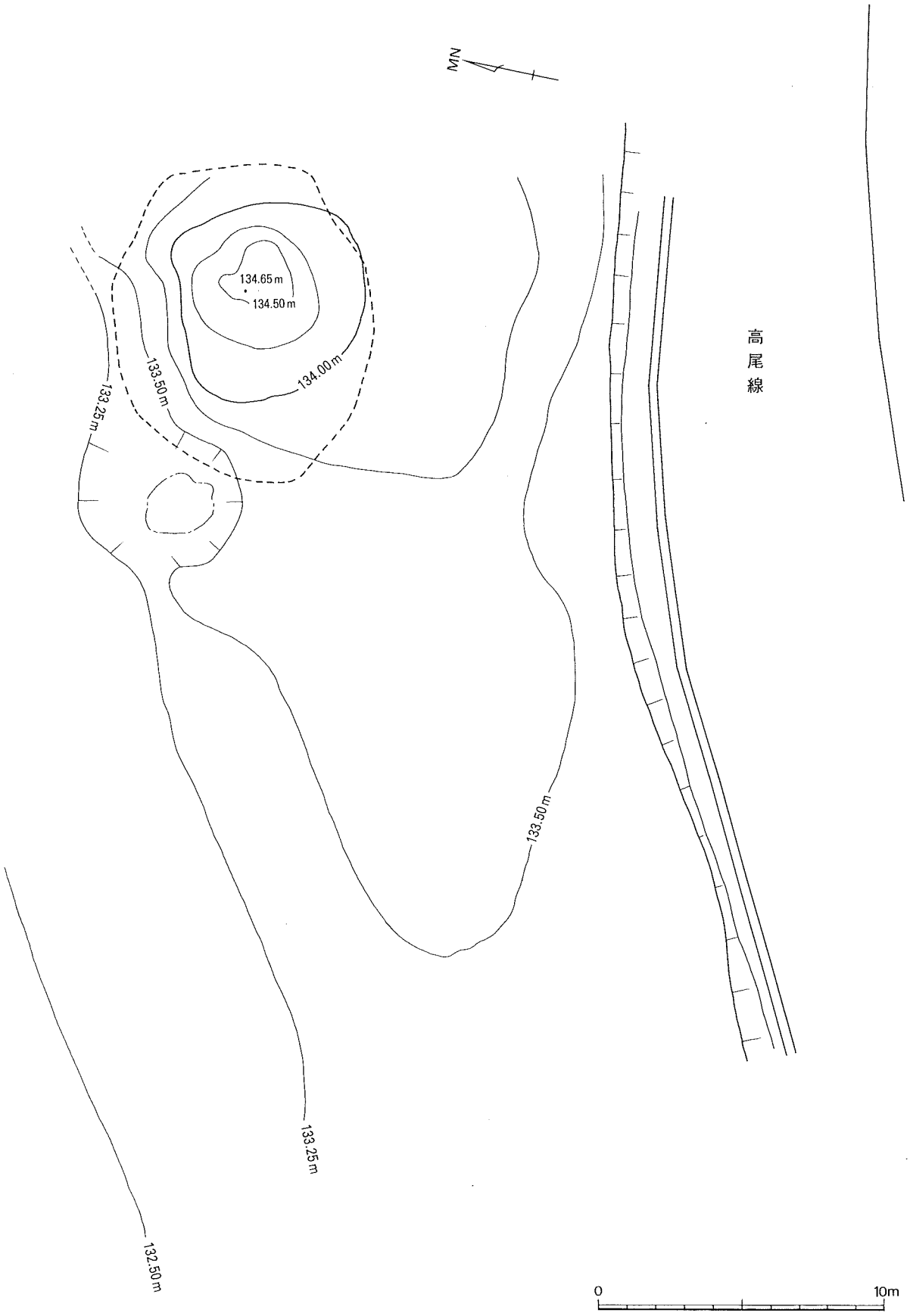
5号墳（第11図）

5号墳は1号墳と2号墳の中間に位置する。円墳で，墳頂高134.65m，径約10m，墳丘高約90cmを測る。墳頂近くに小さな孔が開いており，そこから石室内の板石小口積みの様子が，ごくわずかだが観察できる。

（尾上）



第11図　2号墳墳丘実測図（S＝1／200）



第12図　5号墳墳丘実測図（S＝1／200）

第Ⅳ章　総括

古墳群は芦辺町の東部で高尾山の北西部，海まで約2.2kmを測る地点に位置する。ここを発端部として谷地形が続き，高尾山の北方を南東に下って内海にでる。墳丘は，この谷を見おろす形でほぼ東西にならぶ。地元の方に聞き及んだところでは，かつて数十年前までは，現存する４基の古墳群よりさらに西部，行政無線中継所付近に１基古墳が存在したそうである。ただ残念ながら，この古墳は土地の工事にともなって消失されてしまった。今回の調査で，２号墳が独立した２基の古墳である可能性が高いことがわかったが，そうすると消失した４号墳も含めて，合計７基の古墳が造営されていたことになる。この一帯は以前，七つの墳丘があるという意味でナナヒラ（七片カ）と呼ばれたそうであるが，その話に符合する形になる。

昭和26年から29年・36年における東亜考古学会らによる妙泉寺古墳群の調査時には，10基あまりの円墳が存在したと報告されている。この時点においてすでに２，３基が破壊され，石室の露出するものもあったという。このことからすると，この調査後に，さらに破壊が進み，何基かの古墳が消滅したことになる。

今回の調査により，各古墳の正確な墳丘実測図と，石室の開口する１・３号墳については石室実測図を得ることができた。

１号墳における出土遺物は１点をのぞき全て羨道部のトレンチ掘り下げ時に出土したもので，原位置を保つものではない。その状況は石室内部を荒らされた時に掻き出され，こぼれ落ちたものであろう。石室入口付近からは多量の鉄片や金銅製金具片が出土した。

築造年代は遺物の出土数が乏しいことと，出土状況が原位置を保つものではないことから明確にはできないが，石室構造も加味して，１号墳は６世紀中葉のなかでもやや古い時期に比定されよう。

３号墳は，石室内からの出土とはいえ，遺物の出土は１点のみであり，１号墳同様遺物からの年代の推定は安定した結果を持ち得ないが，石室構造も鑑みて，６世紀後葉に築造時期を比定できよう。

１号墳の特徴である，石室内に塗布された赤色顔料も，入口が開口していたものの，比較的良好な状態で残っていた。また，装飾ということに関してであるが，３号墳の石室内の石材にも線刻らしきものがみつけられた。

今回の調査の成果のひとつに，２号墳の正確な墳丘実測図を得たことがあげられる。このことにより，２号墳が，隣接して造営される独立した２基の古墳である可能性を言及できる。

また５号墳が，規模としては小さいものの，墳頂に開いた穴からの観察で，板石を小口積みした石室を持つ古墳であることが明確になった。

壱岐には270を越える古墳が存在するものの，その内容が明らかになったものは少ない。今回の調査は壱岐の古墳文化の内容を明らかにする重要な意味を持つものと言えよう。

末尾ではあるが，本調査に参加された芦辺町教育委員会の松永泰彦氏について述べておきたい。松永氏は長年壱岐の埋蔵文化財の調査にたずさわられ，非常に大きな成果をあげてこられた。その功績はまことに偉大なものである。その松永氏が平成10年12月６日に急逝された。今回の調査も古墳であったが，壱岐における古墳の内容や状況の把握は氏によるところが大きい。1981年に発表された，壱岐史跡顕彰会刊行の『壱岐15号』における「壱岐島北部における古墳の現状」は，氏が高校生の時から継続してなされてきた分布調査に基づき，島内における古墳の実態を明らかにしたものである。その後原の辻遺跡の調査などでもその力を発揮されてきた。

氏が亡くなられたのは，今回の妙泉寺古墳群の調査よりわずか３カ月ほど後であった。

心よりご冥福をお祈りしたい。

（尾上）

参考文献

藤田国雄1953「壱岐考古調査記」『国立博物館ニュース』 第７７号

藤田国雄1954「壱岐考古調査記」『国立博物館ニュース』 第８９号

松永泰彦1981「壱岐島北部における古墳の現状」『壱岐15号』壱岐史跡顕彰会

図　　版

（景華園遺跡）

削平部分に残る大石

大石下面の調査

大石東西トレンチ

図版１　遺跡中心部の現況

20トレンチ遺物出土状況

21トレンチ出土の晩期土器

図版２　遺物出土状況

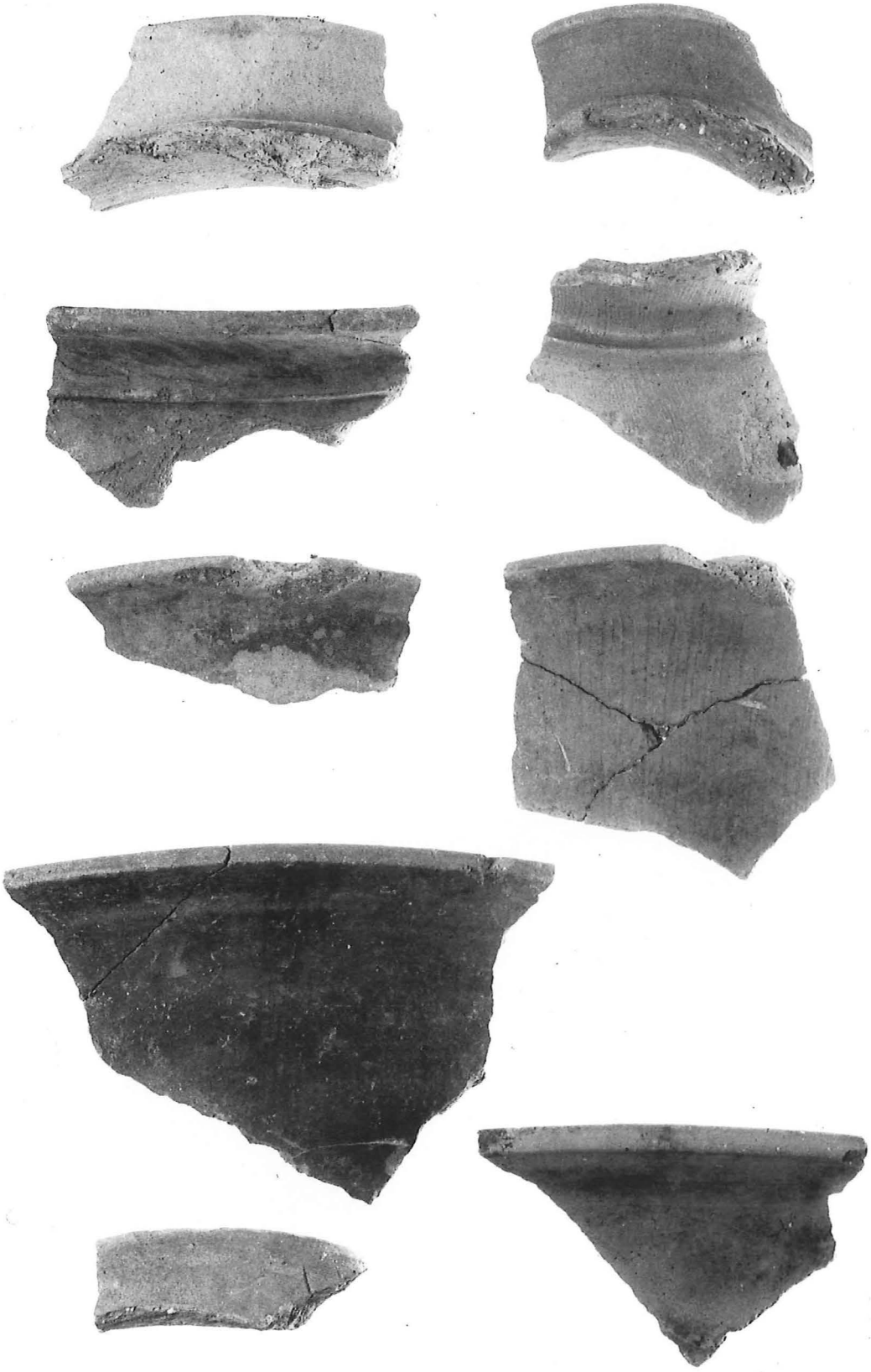
28トレンチ

28トレンチ 近世廃棄土壙

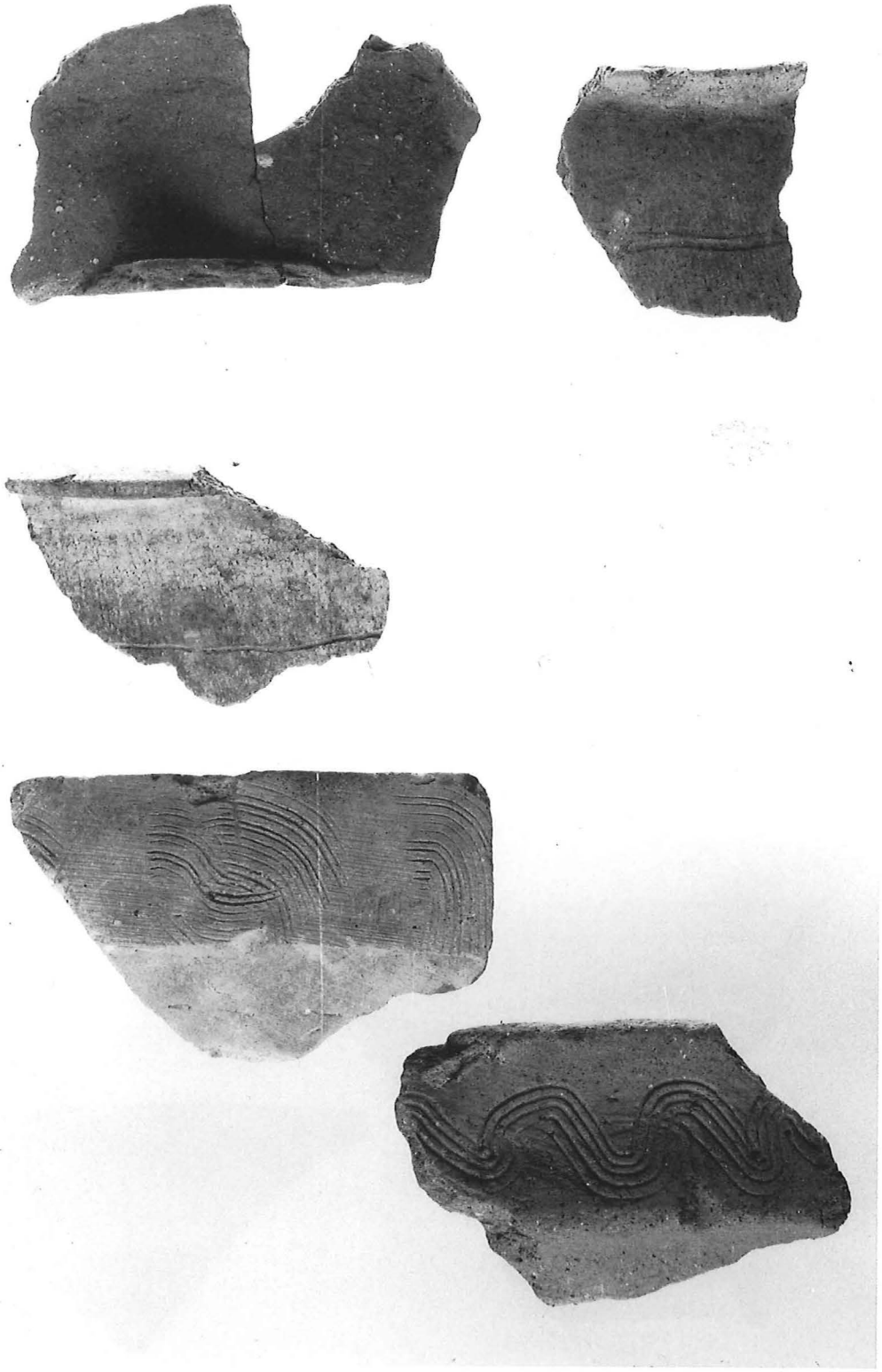
28トレンチ 近世土壙

図版 3　28トレンチ状況

図版4　土　器

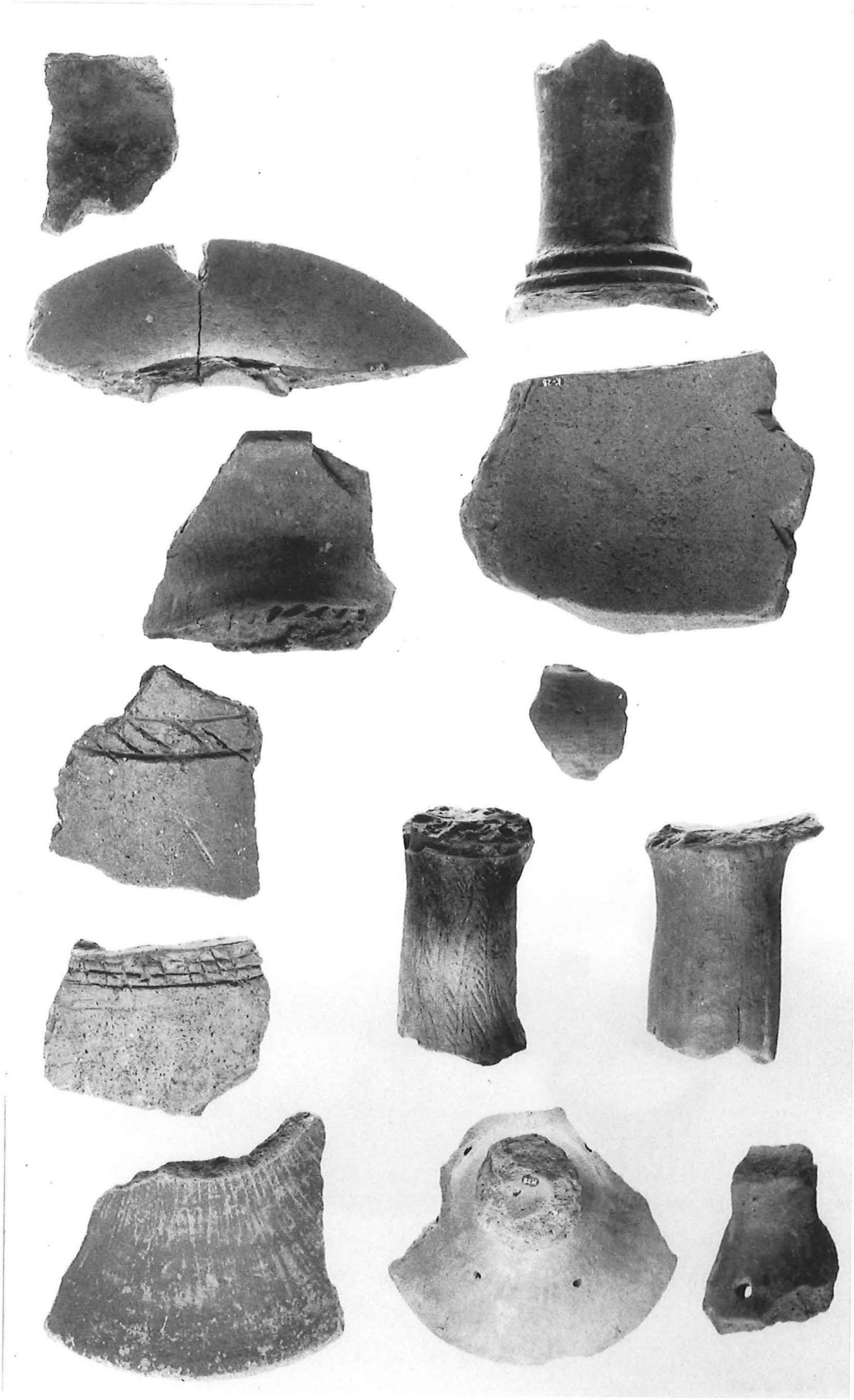


図版5　土　器

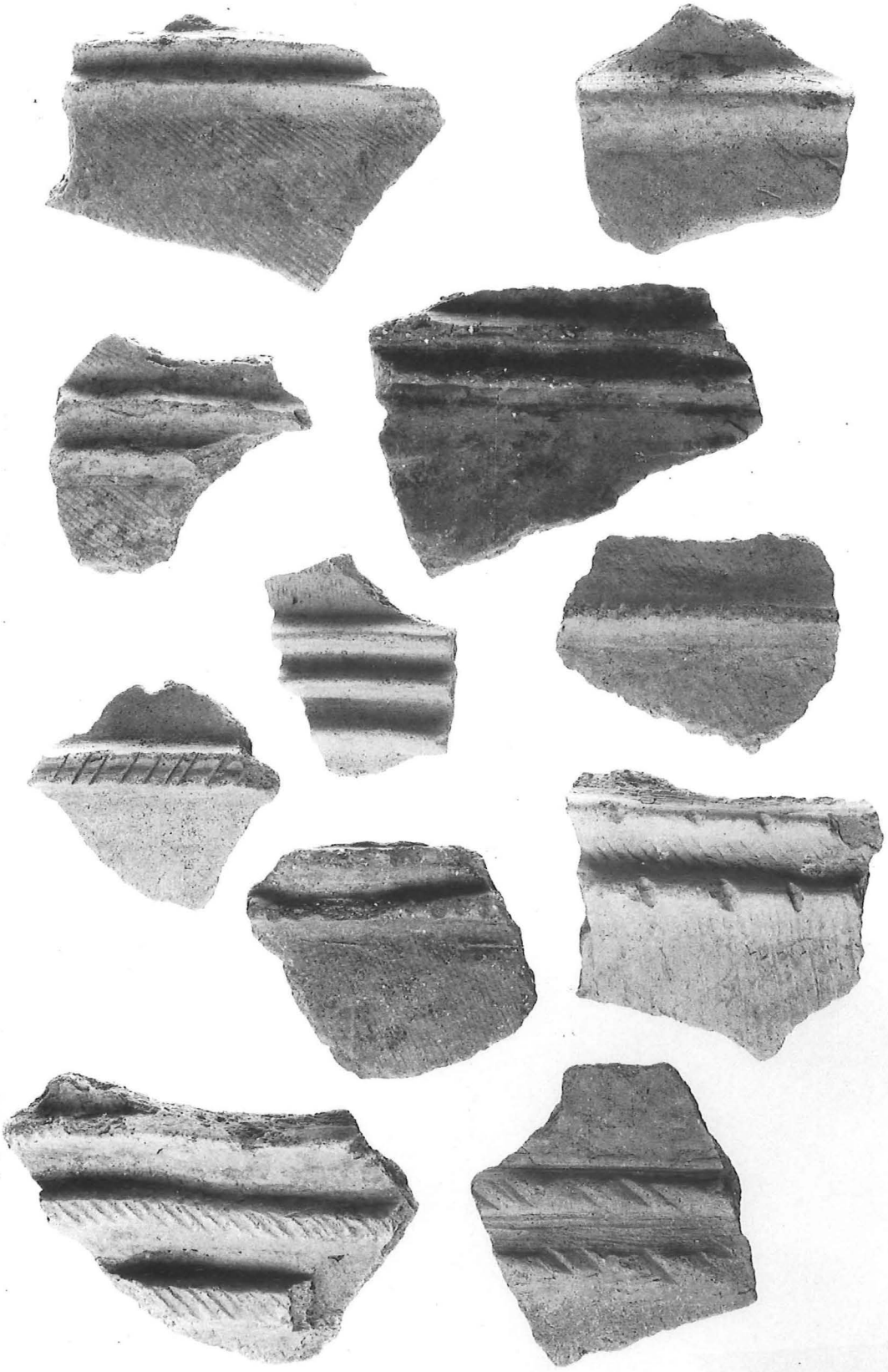


図版6　土　器

図版７　土　器



図版8　土　器



図版9　土　器

図　　版

（妙泉寺古墳群）

1号墳正面

1号墳 遺物出土状況

遺物出土状況

1号墳
遺物出土状況

図版1　1号墳

金銅製金具

耳　環

遺物出土状況

図版２　１号墳 遺物出土状況

玄室入口

天井部
（入口から）

奥　壁

図版３　１号墳 石室

1号墳
玄室入口（左）

1号墳
玄室入口（右）

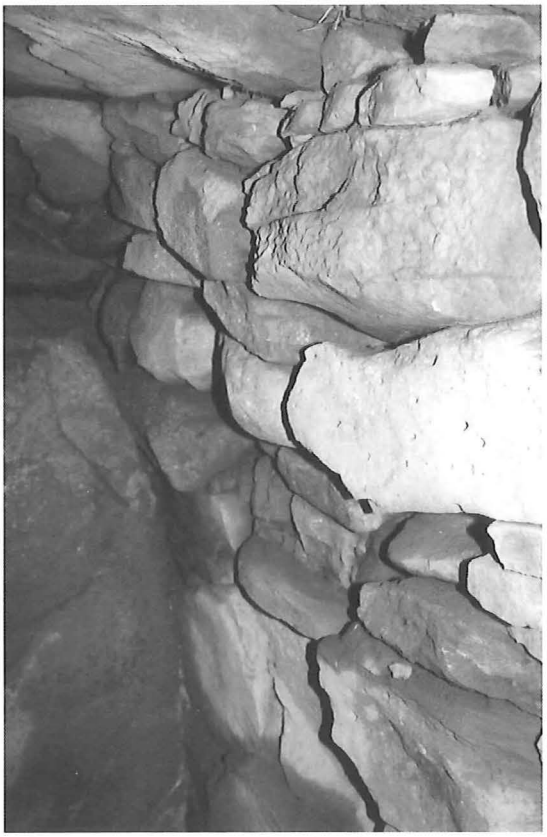
1号墳
床　面
（奥から）

図版4　1号墳 石室

右側壁（奥から）

左側壁（奥から）

左側壁（入口から）



右側壁（入口から）

図版５　１号墳 石室

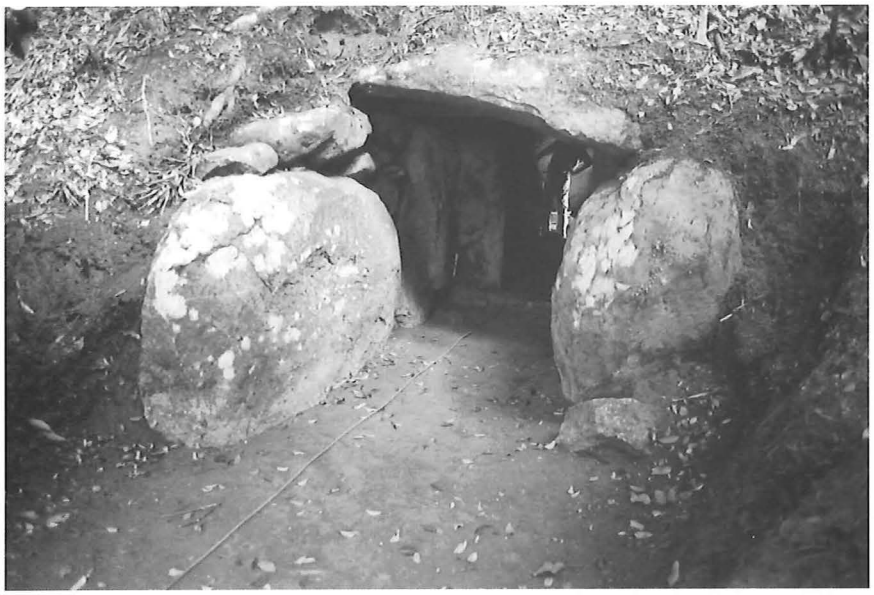
2号墳
（東から）

調査風景

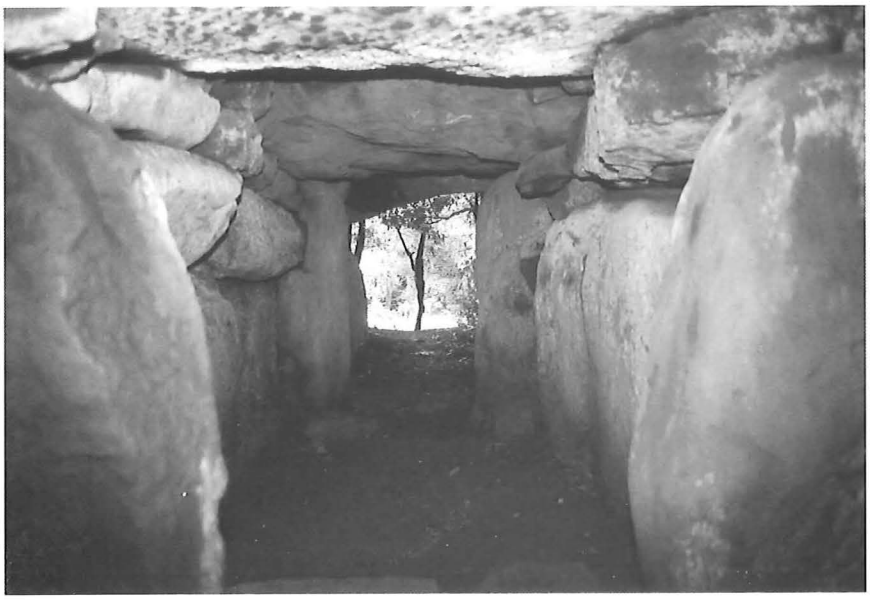
調査風景

図版6　2号墳，1号墳 調査風景

3号墳 近景

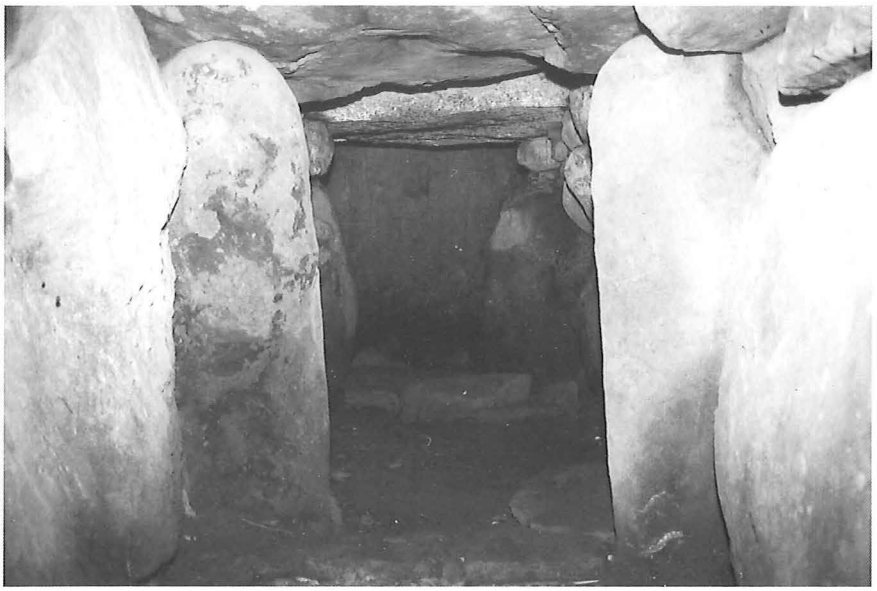


3号墳 石室入口

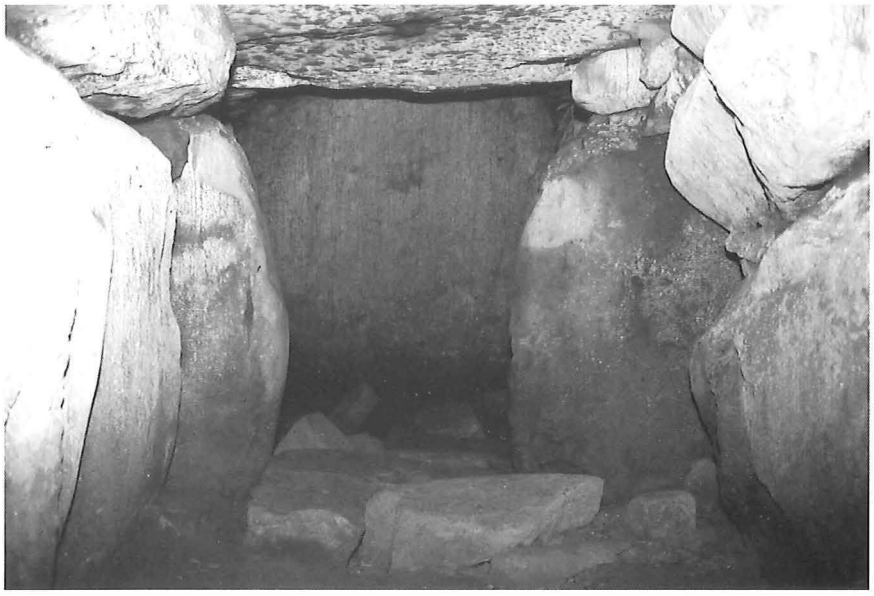


3号墳 前室

図版7　3号墳



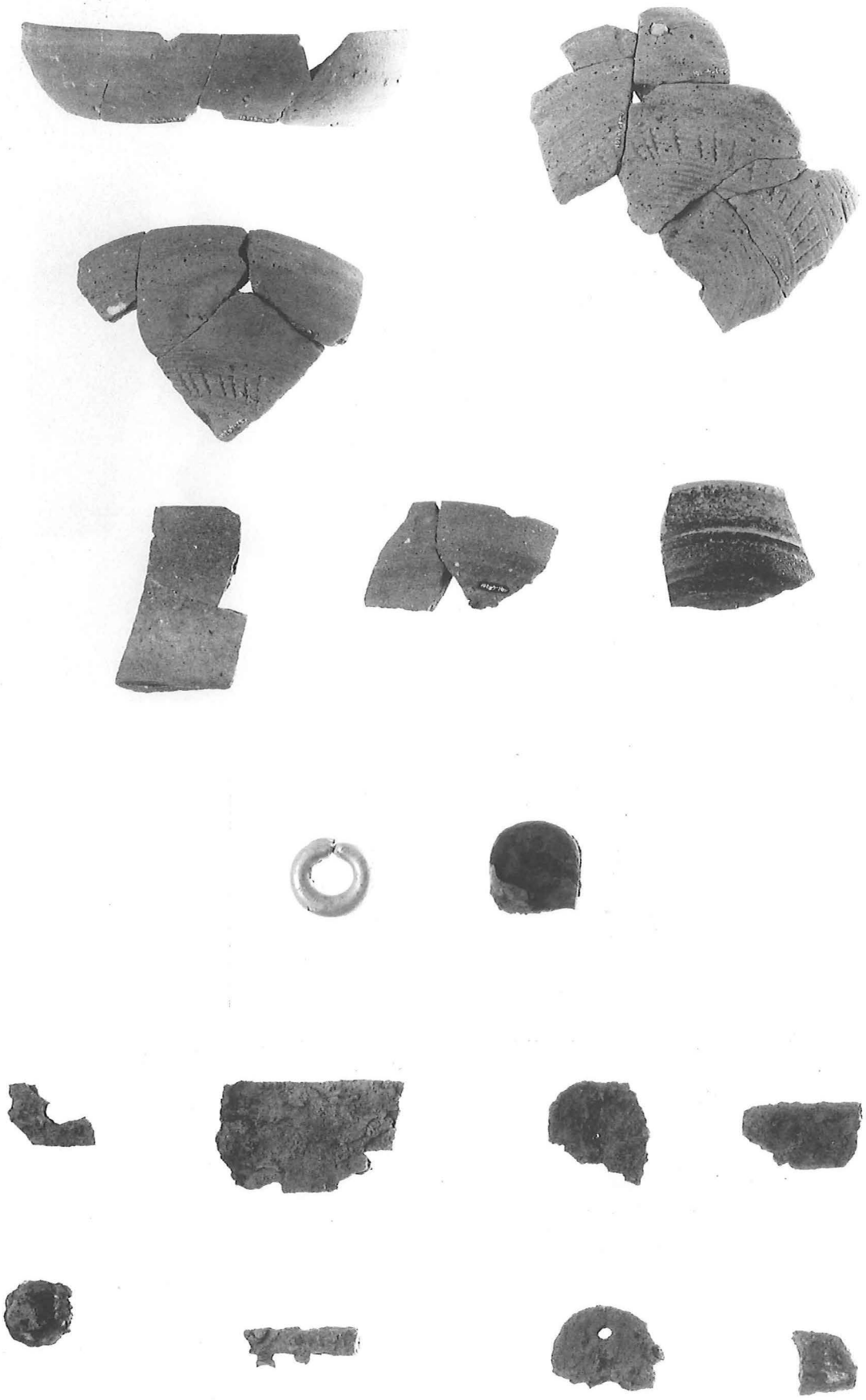
前室・玄室（羨道から）



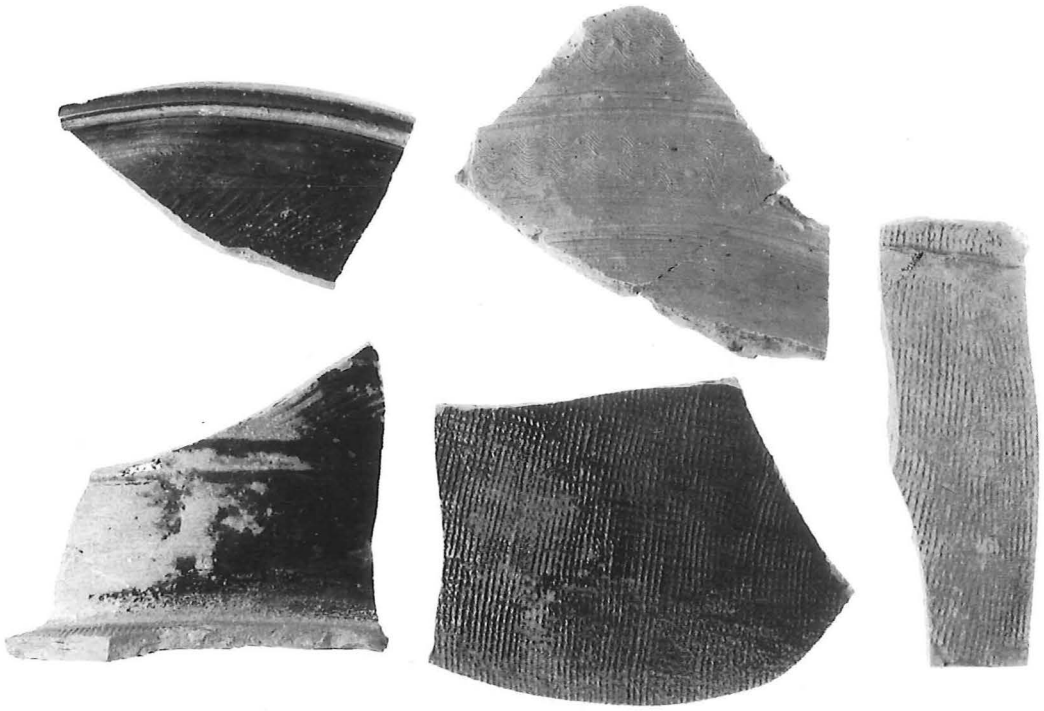
玄室（前室から）

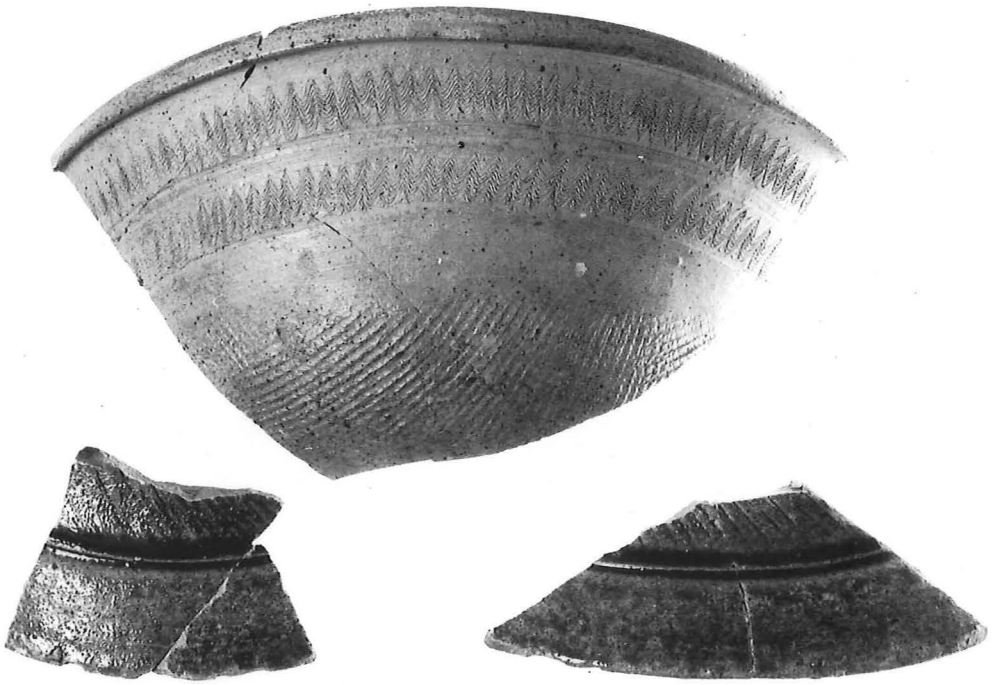
玄室床面

図版８　３号墳



図版９　１号墳 出土遺物





図版10　1号墳 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	けんないしゅよういせきないようかくにんちょうさほうこくしょ
書名	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ
副書名	
巻次	Ⅲ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 156集
編著者名	福田一志・川口洋平・尾上博一
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎県長崎市江戸町2-13　　TEL 095-824-1111
発行年月日	西暦　2000年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
けいかえんいせき 景華園遺跡	島原市(しまばらし)中本町(なかもとまち) 高城元(たかしろもと)					19980727 ～ 19980904	165㎡	主要遺跡内容確認調査
みょうせんじこふんぐん 妙泉寺古墳群	壱岐郡(いきぐん)芦辺町(あしべちょう) 中野郷(なかのごう)東触(ひがしふれ)					19980817 ～ 19980917	80㎡	主要遺跡内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
景華園遺跡	包含地	弥生			
妙泉寺古墳群	古墳	古墳	4基の円墳		

長崎県文化財調査報告書　第156集

県内主要遺跡内容確認調査報告書 Ⅲ

平成12年 3月31日

発　　行　　長崎県教育委員会
　　長崎市江戸町2－13

印　　刷　　九州凸版株式会社
　　大村市玖島1丁目51－1